

調査を実施して

3年前に、おぼつかない足どりでスタートしたモノグラフ「中学生の世界」も、第5号を刊行できることになった。当初、3000部でスタートした発行部数も、第3号「中学生の母親の意識」や第4号「非行文化をめぐって」あたりから、増刷につぐ増刷で、10000部を越える状況を迎えている。

先生方の研究会のテキストとして、あるいは、PTAで読書会を開きたいから教科書代わりにと、何十部単位の申し込みを受け、うれしい悲鳴をあげる昨今である。

多くの方々の目にとまる機会がふえてきただけに、より一層役立つ資料を提供したいと、テーマ設定にあたって、なん度かの検討会がもたれた。その結果、前号の「非行文化」に続いて、中学教育の最も大きな問題である「学業不振」をテーマに定めることにした。そして、東京学芸大学で、学業不振をテーマに修士論文を書いた高橋美恵さん（千葉県教育センター所員）の協力を得て作成したのが、本報告書である。

学業不振の背景は多岐に及ぶので、本報告で扱う問題は、氷山の一角にすぎず、ふれ残したものがあまりに多い。そうした意味で、学業不振研究の成果を概観する一助になればという気持ちから、巻末に研究ノートを付した。

今後また、機会をみて、「続・学業不振」の調査を行う予定であるが、とりあえず、次号は、「交換日記」を予定し、すでに、調査票の配布段階に入っている。また、「中学生の読書傾向」や「高校受験」などが、その次のテーマとしてあげられ、調査票の検討が加えられている状況にあることを付記しておきたい。

なお、いつものことながら、本調査に援助、協力をいただいた株式会社福武書店社長・福武哲彦氏をはじめ福武書店の方々に感謝の気持ちを表しておきたい。第1号以来、文字通り“Support, no control”の姿勢をとり続けられていただいたので、調査がしやすい反面、責任の重さを痛感する次第である。また、調査実施にあたって、中学通信教育部指導部長・加藤智禧氏、調査室担当の佐藤雅子氏などの全面的な協力を仰いだ。

最後になったが、本調査にご協力を仰いだ中学関係者、および、生徒諸君にも、感謝の気持ちを述べておきたい。プライバシーを守るために、学校名は省略させていただいたが、本報告をもって、お礼の代わりにさせていただきますと思う。

昭和55年2月

奈良教育大学教授 深谷昌志
千葉県教育センター所員 高橋美恵

付記

調査票の作成は、上記2名が担当したが、報告書の本文は深谷昌志が執筆した。また、研究ノートは、高橋美恵が独自に執筆している。

本報告書の要約

- ① 学業成績が「下の方」と自覚している生徒の割合は、全体のほぼ2割である(表2)。
- ② 授業を、完全にわかる生徒は1割弱にすぎず、2～3割の生徒は、授業がわからないと答えている(表3)。
- ③ 学年が上がるにつれて、授業がわからなくなる生徒がふえ、それと同時に、学業不振を感じる生徒の割合も、25%前後になる(表5～7)。
- ④ 生徒たちは、学業成績の開きが、生得的な差よりも、努力の開きからもたらされると信じている(表8)。
- ⑤ 生徒たちの間に、成績のよい子は禁欲的な態度の持ち主で、学業不振の子は耐性に欠ける、という見方が定着している(表10)。
- ⑥ 学業成績が上がると自信が生まれ、下がると自信が失われる。つまり、学業成績の良し悪しは、自我の中枢部分に関連してくる(表14, 15)。
- ⑦ 成績がトップ層の生徒は、学業を含めて、その他の領域でも、自信にみちあふれていた。しかし、そうした生徒は、全体の4%にすぎず、その他の生徒は、成績が下がるのと比例する形で、自信を喪失していた(表16)。
- ⑧ 予想外なことに、成績が最下層の生徒の自己像は暗さを帯びていなかった。しかし、そうした態度は、未来への希望を放棄した開き直りにも似た感情の表れである(図5)。
- ⑨ 将来、一流大学へ入れそうだと信じている生徒の割合は、7.9%にすぎず、54.3%の者は、入学のむずかしさを予感していた(表18)。
- ⑩ 「自分なんか生まれてこなければよかった」とか「ふと死にたいと思うことがある」生徒は、全体のほぼ2割に達し、特に、学業不振の生徒に、そうした傾向が顕著である(表24, 25)。なお、成績がトップ層の生徒にも、不適応傾向が認められた。
- ⑪ 能力別学級編成や成績の公表についてトップ層の生徒と学業不振ぎみの生徒とは、正反対の意見を述べていた(表28, 29)。

勉強に苦手意識を持つ子は、生徒全体の中でおおむね2割の割合を占めた。しかし、「成績にひけ目意識を持ち、それがパーソナリティに暗さをもたらしている生徒たち」という観点でとらえると、多めに見積もって、上位の2割、厳密な見方をすると「トップクラス」の数%の生徒を除き、その他の生徒は程度の差こそあれ、学業不振意識を抱いていた。本来能力のひとつの領域にすぎない学業成績が、子どもの価値観の中で中枢の位置を占めている。そのため、多くの生徒たちは、不必要な劣等感を抱いている。学校や家庭で、個々の生徒の長所を認め、多様化された価値観の中で、生徒たちを伸ばす必要性を痛感した。

I 章 学業不振の状況と背景



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

1 調査目的

現代社会の病理としての学業不振

「学業成績」とは、いうまでもなく、学習内容を習得できたかどうかを示すひとつの目安にすぎない。なん名かが100 mの徒競走を行ったとしても、走るのが速い子と遅い子の開きが生まれ、ひとつの曲を聞いても、早く覚える子と覚えの悪い子との差が生じてくる。こうした開きは、本来、個体差ともいうべきもので、誰もなんらかの得意な領域と苦手な領域とを持っていよう。

仮に、走るのがきわめて遅い子がおり、そのために、運動嫌いの傾向が多少認められたとしても、それがパーソナリティ全体に影響を及ぼさない限り、そうした不得意さそのものは、さしたる問題にならない。そして、英語や数学に対する不得意さも、本来なら、そうした種類のものであるのだが、現代では、学業の苦手は、他の不得意さと比較にならぬほどのひけ目意識を生徒たちに与えている。

そうした意味でいえば、学業不振は、学力の価値が必要以上に強調される学歴偏重文化のもたらした病理の世界といえなくもない。

学業不振についての先行研究については、研究ノートにくわしいので、それを参照してほしいが、端的に言って、本号で明らかにしたいのは、実態としての学業不振が、生徒たちの心に、どのような精神的な歪みを与えるかである。従って、学業不振の研究の中で、多くの研究者が試みている「知能と学業不振との関係」や「学業不振の家庭環境」、「学業

不振と動機づけ」などの考察は割愛せざるをえなかった。

調査票の構成は、巻末に付した通りだが、

- ① 授業に対する理解度 1
- ② 成績の変化が生徒の気持ちにどのような影響を与えるか 4, 5
- ③ 成績のよい子に対する評価 7
- ④ 成績のよくない子に対する評価 8
- ⑤ 疎外感や不適応感の有無 11, 12
- ⑥ 自己評価や自分に対する自信 13, 14
- ⑦ 授業に対する希望 2

などを骨子として作られている。

なお、調査校としては、高校進学をめぐる状況がきびしい地域という観点から、東京都内と、隣接する県庁所在地の公立中学5校を選び、昭和54年7月上旬、調査を実施した。また、有効サンプル数は、表1に掲げた通りに1781名で、内、男子909名、女子872名である。

表1 サンプル数 (人)

性別 学年	男	女	TOTAL
1年	267	267	534
2年	266	264	530
3年	376	341	717
TOTAL	909	872	1,781

2 形態的な学業不振

学業不振候補生
は全体の約2割

ひとくちに、学業不振の生徒といっても、そうした生徒は、生徒全体のなん%位を占めるのであろうか。

表2に、生徒たちの学業成績に対する自己評価を示した。教科により、多少のちらばりが認められるが、大づかみにすると、成績上位が1割、「やや上」15%、「中」35%、「やや下」2割、「下位」2割が生徒たちの平均的な成績評価のプロフィールである。従って、やや多めに捉えれば、表2の「下の方」と「ずっと下」とを加えた2割の生徒、少なめに対象を限定すれば、ずっと下の6～9%が、学業不振候補生といえよう。

しかし、すでにふれたように、単に勉強が苦手だけでは、学業不振とは定義しにくい。「勉強が苦手」が、苦手意識をもたらし、そうした意識が、生徒たちの価値観に大きな歪みを与えた時、つまり、実態としての成績不振が、精神的な面に障害をもたらした時に、「学業不振の生徒」が成り立つと考えられる。

従って、仮に、表2の2割、あるいは数%の生徒が学業不振候補生だとしたら、そうした形態的な学業不振が、生徒たちの心に、精神的な歪みを与えているのかどうか明らかにする必要がある。

表3に、授業の理解度を、教科別に尋ねた結果を示した。数値から明らかなように、授業内容を「100%理解できる」と答えた生徒は1割弱、これに「70%位理解できる」を加えても、「内容がわかった上で、授業に出席している」生徒は4割程度にすぎない。それに対し、授業が「ほとんど理解できない」あるいは、「30%位しかわからない」生徒は2割を超える。

もちろん「授業がわかる」と答えた生徒が成績上位群に属し、成績が下位になるにつれ

表2 学業成績に対する自己評価

(%)

自己評価 教科	トップ クラス	上の方	やや上	中くらい	やや下	下の方	ずっと下
英語	4.9	9.5	15.0	28.8	19.2	13.7	8.9
	14.4					22.6	
数学	3.9	7.6	12.7	34.0	19.8	13.1	8.9
	11.5					22.0	
国語	2.7	6.8	14.4	42.4	19.8	8.8	5.1
	9.5					13.9	
理科	3.8	6.9	15.3	36.5	20.5	11.4	5.6
	10.7					17.0	
社会	4.2	7.3	14.8	35.7	21.1	10.9	6.0
	11.5					16.9	

表3 授業の理解度

(%)

理解度 教科	100%理解 できている	70%ぐらい 理解	半分ぐらい 理解	30%ぐらい 理解	ほとんど理解 できない
英語	9.1	32.3	30.5	18.8	9.3
	41.4			28.1	
数学	10.1	33.5	31.5	15.3	9.7
	43.6			25.0	
国語	6.1	37.2	39.5	12.7	4.5
	43.3			17.2	
理科	8.2	32.5	37.6	16.9	4.8
	40.7			21.7	
社会	8.9	32.8	37.1	16.2	5.0
	41.7			21.2	

て、「授業がわからない」に反応する生徒の割合が増すのは確かだと考えられるが、そうした程度を明らかにするために、成績の自己評価と授業の理解度とのクロス集計を試みてみた。

表4からも明らかのように、授業の理解度という観点から捉えると、生徒の成績は、4つの層に分かれる。

- ① 授業をほぼ完全に理解している生徒たち＝学業成績が「トップクラス」から「やや上」までに属している生徒を中心に生徒全体のほぼ1割強を占める。
- ② 授業をほぼ70%ぐらい、理解している生徒＝成績が「中くらい」の生徒で、全体の1/2程度の割合を占める。
- ③ 授業が半分ぐらいわかる生徒＝成績が「やや下」の生徒で、生徒層の3割を占める。
- ④ 授業を30%も理解できない生徒＝成績が「下の方」あるいは「ずっと下」だと思っている生徒で、生徒集団の中の割合はほぼ2割である。

表4 授業の理解度(数学)と成績の自己評価 (％)

理解度 自己評価	100%理解 できている	70%ぐらい 理解	半分ぐらい 理解	30%ぐらい 理解	ほとんど理解 できない	自己評価 の分布
トップクラス	72.5	13.0	2.9	1.4	10.1	3.9
	85.5			11.5		
上の方	42.9	51.9	3.0	0.0	2.3	7.6
	94.8			2.3		
やや上	17.5	68.6	10.3	2.7	0.9	12.7
	86.1			3.6		
中くらい	4.9	47.3	40.6	5.9	1.3	33.9
	52.2			7.2		
やや下	0.3	16.2	57.8	21.4	4.3	19.8
	16.5			25.7		
下の方	0.0	6.9	29.9	45.0	18.2	13.2
	6.9			63.2		
ずっと下	1.3	2.5	8.3	29.3	58.6	8.9
	3.8			87.9		
全体	10.2	33.5	31.5	15.2	9.6	100.0

学業不振の生徒をどの範囲に限定するかについては、授業の理解度の他に、これから先にいくつかの可能性を検討することにしたいが、表4を手がかりとすれば、学業不振の対象が、成績の自己評価が、「下の方」あるいは「ずっと下」に属する2割の生徒である可能性が強い。

**学年が上がると
学業不振の生徒
が増加する**

表5と表6に、英語と数学に例をとって、授業の理解度の学年別推移を示した。

本調査を実施したのは、昭和54年7月であるから中学1年生にとっては、1学期の期末試験を終えた直後で、まだ中学生らしい授業が始まって間もない時期にあたる。そうした関係からか、さすがに、授業を理解できない生徒は1割強にすぎない。しかし、中2や中3ともなると「授業を理解できない」生徒の占める割合は、3～4割に達する。

学年を追って、授業内容についての理解度が低下するのであるから、当然、学業成績に自信を失う生徒も増加してこよう。事実、表7に示したように、学業に苦手意識を持つ生徒は、中学1年の13.9%から中2の25.8%へと、中1から中2への1年間で倍増している。しかし、それから後は、中3の24.6%の数値が示すように、ほぼ同じ割合を保っている。なお、念のために、別の調査——東京や大阪などの小4～小6、計2500名を対象として昭和54年7月実施——のデータを利用して、小学生の成績評価の変化を表の中の上欄に掲げているが、この結果を参照すると、成績の自己評価は、学年が上がると暗さを増すが、小6と中1との間には、きわだった差は認められないといえよう。つまり、中学生になったからといって、成績に対する見通しが急に暗くなることはないが、中1から中2へ進む過程で、学業不振の生徒が増加する可能性が強い。

表5 授業の理解度(英語)と学年, 性別 (%)

		100%理解 できている	70%ぐらい 理解	半分ぐらい 理解	30%ぐらい 理解	ほとんど理解 できていない
1 年	男子	15.5	32.5	34.3	12.1	5.7
		48.0			17.8	
	女子	15.0	44.0	28.6	10.5	1.9
		59.0			12.4	
2 年	男子	6.4	28.2	30.5	21.4	13.5
		34.6			34.9	
	女子	8.4	30.8	35.0	21.3	4.6
		35.2			25.9	
3 年	男子	7.2	29.1	23.5	20.6	19.5
		36.3			40.1	
	女子	4.1	30.3	33.4	24.6	7.6
		34.4			32.2	
全 体		9.1	32.3	30.5	18.8	9.3

表6 授業の理解度(数学)と学年, 性別 (%)

		100%理解 できている	70%ぐらい 理解	半分ぐらい 理解	30%ぐらい 理解	ほとんど理解 できてない
1 年	男子	14.7	39.5	31.9	9.4	4.5
		54.2			45.8	
	女子	15.4	39.7	31.5	11.6	1.9
		55.1			44.9	
2 年	男子	12.8	28.9	26.3	22.6	9.4
		41.7			58.3	
	女子	5.3	34.6	31.2	15.2	13.7
		39.9			60.1	
3 年	男子	9.4	31.3	29.5	16.1	13.7
		40.7			59.3	
	女子	4.7	29.1	37.6	16.2	12.4
		33.8			66.2	
全 体		10.1	33.5	31.5	15.3	9.6

表7 成績の自己評価の学年別推移

(%)

	トップ クラス	上の方	やや上	中くらい	やや下	下の方	ずっと下
小学 4年	8.5	9.5	18.6	43.8	8.9	7.3	3.4
	18.0					10.7	
5年	6.7	9.0	20.1	40.3	11.6	8.5	3.8
	15.7					12.3	
6年	5.8	8.4	22.8	36.2	12.2	10.5	4.1
	14.2					14.6	
中学 1年	4.6	8.8	14.6	35.8	21.2	10.5	3.4
	13.4					13.9	
2年	4.3	5.3	13.2	32.1	17.2	16.6	9.2
	9.6					25.8	
3年	2.8	8.2	10.6	32.8	20.1	12.0	12.6
	11.0					24.6	
全 体	3.9	7.6	12.7	33.9	19.8	13.1	8.9
	11.5					22.0	

**まじめに授業を
受けないから学
業不振になる**

このように、学業不振ぎみの生徒は、全体の2割、しかも、中学2～3年生の4人に1人の割合に達している。従って、学業不振は、一部の例外的な生徒というより、中学教育全体にかかわる問題といえよう。

しかし、今までの考察では、学業不振の形態的な分析にとどまっていたので、ここで学業不振のもたらす心理的な歪みに目を向けてみたい。その前に、もう少し、一般化された形で、学業不振に対する生徒たちの見方を捉えておこう。

表8は、生徒たちに、「クラスでトップクラスの成績をとっている子」と「勉強の苦手な子」を想起させ、どうして勉強の得意・不得意が生じたのか、その理由を推定させた結果を示している。生徒たちによれば、成績のよい理由は

①生まれつき頭がよいので、②勉強一途の生活を送っているわけでもないのだが、③まじめに授業を受け、④家でたくさん勉強しているからだ。

成績が不振の理由は、

①生まれつき勉強が苦手なわけではなく、②授業をまじめに受けず、③家で勉強しないで、④勉強以外のことをいろいろとしているからだ。

となる。この結果で注目をひくのは、生徒たちが、成績の良し悪しの理由として 1. 生得的な要素を否定し、2. 学習努力と成績との関連を重視している点、であろう。すなわち、生まれつき勉強の苦手な子などはいない。怠けているから、学業不振になるという論理である。

なお、学業の得意・不得意の原因をどう考えるのかについて、学業成績別のクロス集計結果を、表9に掲げたが、成績階層による開きは、それほど顕著ではなかった。しかし、その中では、成績がトップとラストの生徒層が、「成績のよい子が、必ずしも、まじめに授業を聞いてるとも、不振ぎみの子がまじめな態度をとっているともいえない」と、成績のよき=まじめな学習態度、という関連を否定しているのが注目をひく。学業不振の生徒の中にも、まじめに授業を聞いている子がいるのを感じているのであろうか。

表8 成績がよい理由・悪い理由

(%)

		とても かなり そう思う	少し 思う	あまり ぜんぜん 思わない
成績が トップ クラスの子	まじめに授業を受けている	43.1 29.6 (72.7)	16.7	6.0 4.6 10.6
	家でたくさん勉強している	29.8 28.9 (58.7)	25.0	10.7 5.6 16.3
	もともと頭が良い	12.5 13.9 26.4	27.6	23.6 22.4 (56.0)
	勉強一本の生活をしている	8.4 11.1 19.5	22.0	38.4 20.1 (58.5)
勉強が 苦手な 子	授業をまじめにうけていない	37.9 29.4 (67.3)	22.6	6.3 3.8 10.1
	家で勉強をしない	35.9 27.5 (63.4)	25.0	7.4 4.2 11.6
	もともと勉強が苦手	14.3 15.1 29.4	27.7	23.2 19.7 (42.9)
	勉強以外のことをいろいろしている	24.6 24.7 (49.3)	24.2	16.8 9.7 26.5

表9 学業成績と得意・不得意の原因

(%)

理由	対象 自己 反応 評価	成績がトップクラスの子			勉強の苦手な子		
		とても～ かなり	少し	あまり～ ぜんぜん	とても～ かなり	少し	あまり～ ぜんぜん
まじめに 授業を 受けて いる	トップ クラス 上の方	49.9	17.6	(32.5)	71.0	5.8	(23.2)
	やや上	72.8	15.0	12.1	70.7	15.0	15.3
	中くらい	72.8	19.6	7.6	75.0	16.5	8.5
	やや下	72.9	17.0	10.1	68.8	23.5	7.7
	下の方	76.7	16.0	7.3	62.8	28.2	9.0
	ずっと下	77.0	13.9	9.1	66.5	24.8	8.7
	ずっと下	68.0	15.4	(16.6)	59.1	24.7	(16.2)
生まれ つき 頭が よい	トップ クラス 上の方	28.0	16.2	(55.9)	26.1	7.2	(66.7)
	やや上	25.5	28.6	45.8	21.1	21.8	(57.2)
	中くらい	28.1	25.4	46.5	29.9	29.9	40.1
	やや下	24.9	29.7	45.3	28.0	29.5	42.6
	下の方	27.0	29.0	43.9	33.7	29.0	37.4
	ずっと下	28.7	27.0	44.2	31.6	29.0	39.5
	ずっと下	25.3	25.3	49.4	29.9	26.0	44.1

表10 成績がよい子と悪い子のがまん度

(%)

		しょっちゅう がまんしている	たまには がまんする	ほとんど がまんしていない
成績が トップ クラスの子	好きなTVをみるのを	22.8 35.4 (58.2)	27.3	9.5 5.0 (14.5)
	好きなマンガを読むのを	18.3 33.4 (51.7)	29.0	12.2 7.1 (19.3)
	もっと寝てたいのを	14.9 23.6 (38.5)	29.9	18.8 12.8 (31.6)
	クラブ活動の時間を	11.7 13.3 (25.0)	21.5	27.0 26.5 (53.5)
	友だちと遊ぶのを	7.3 9.9 (17.2)	17.9	29.4 35.5 (64.9)
勉強の 苦手な 子	好きなTVを見るのを	2.4 5.0 (7.4)	13.5	36.2 42.9 (79.1)
	好きなマンガを読むのを	2.1 4.0 (6.1)	14.5	38.1 41.3 (79.4)
	もっと寝てたいのを	2.2 3.7 (5.9)	13.9	32.2 48.0 (80.2)
	クラブ活動の時間を	2.0 2.9 (4.9)	13.8	31.5 49.8 (81.3)
	友だちと遊ぶのを	2.5 2.4 (4.9)	8.3	26.3 60.5 (86.8)

細部に着目すると、このような傾向が認められるが、全体として捉えた時、生徒たちの間に、学業不振を生まれつきではなく、努力不足から生じるとみている態度がきわだっていた。そこで、もう一度、成績がトップの子とラストの子を想定させ、日常生活の中でどの程度のがまんをしているのかを尋ねると、表10のような結果が得られる。

学業不振の生徒は、がまん強さに欠ける

表中の数値から明らかなように、成績の優秀な子はがまんをしており、不振ぎみの子はがまんが足りないという見方が、生徒たちの間に定着している。

成績のトップの子は、

①クラブ活動や、②友だちづき合いまでをがまんしていることはないが、③テレビや、④マンガを見るのはがまんしている。

勉強の苦手な子は、

①クラブ活動や②友だちづき合いはむろんのこと、③テレビや、④マンガも、まったく、がまんしようともしていない。

従って、勉強の得意な子と苦手な子が、それぞれ、どんなタイプの生徒なのかを想定させた結果でも、表11のようなデータが得られている。しかし、表11は数値の羅列で理解しにくいように思われるので、これを、ひとつのグラフに要約すると、図1の通りとなる。

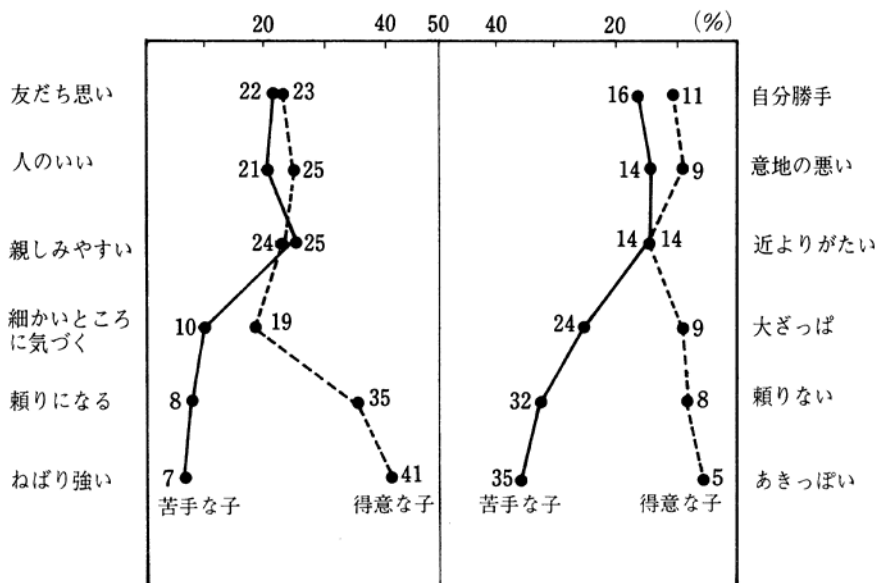
- ① 学業成績の影響をほとんど受けない属性=1「友だち思い」2「人のよさ」3「親しみやすさ」
- ② 成績により、多少開きのある属性=成績のよい子は細かいところに気がつくが、不振ぎみの子は大ざっぱな性格である。

表11 勉強の得意な子と苦手な子の性格

(%)

		そう思う			どちらでもない	そう思わない			
		とても	かなり	すこし		すこし	かなり	とても	
成績がトップクラスの子	友だち思い	9.4	14.0	22.8	34.7	8.4	4.7	6.0	自分勝手
		23.4		65.9		10.7			
	人のいい	11.2	13.9	20.6	39.3	6.0	2.8	6.2	意地の悪い
		25.1		65.9		9.0			
	親しみやすい	10.3	13.5	19.5	29.5	12.9	5.7	8.6	近よりがたい
		23.8		61.9		14.3			
細かいところに気づく	7.0	11.5	21.7	40.5	10.2	4.2	4.9	大ざっぱな	
	18.5		72.4		9.1				
頼りになる	15.7	19.0	23.5	28.0	6.1	2.4	5.3	頼りない	
	34.7		57.6		7.7				
ねばり強い	17.8	23.6	24.6	25.5	3.9	1.5	3.1	あきっぱい	
	41.4		54.0		4.6				
勉強の苦手な子	友だち思い	11.5	10.9	19.4	33.9	8.8	6.6	8.9	自分勝手
		22.4		62.1		15.5			
	人のいい	11.2	9.8	18.3	38.4	7.9	5.7	8.7	意地の悪い
		21.0		64.6		14.4			
	親しみやすい	13.5	11.9	20.4	32.0	8.3	5.7	8.2	近よりがたい
		25.4		60.7		13.9			
細かいところに気づく	4.7	4.8	11.5	38.9	16.2	11.2	12.7	大ざっぱな	
	9.5		66.6		23.9				
頼りになる	4.4	3.2	8.8	34.0	17.4	11.6	20.6	頼りない	
	7.6		60.2		32.2				
ねばり強い	4.2	2.6	8.4	30.4	19.1	15.7	19.6	あきっぱい	
	6.8		57.9		35.3				

図1 勉強の得意な子と苦手な子の性格

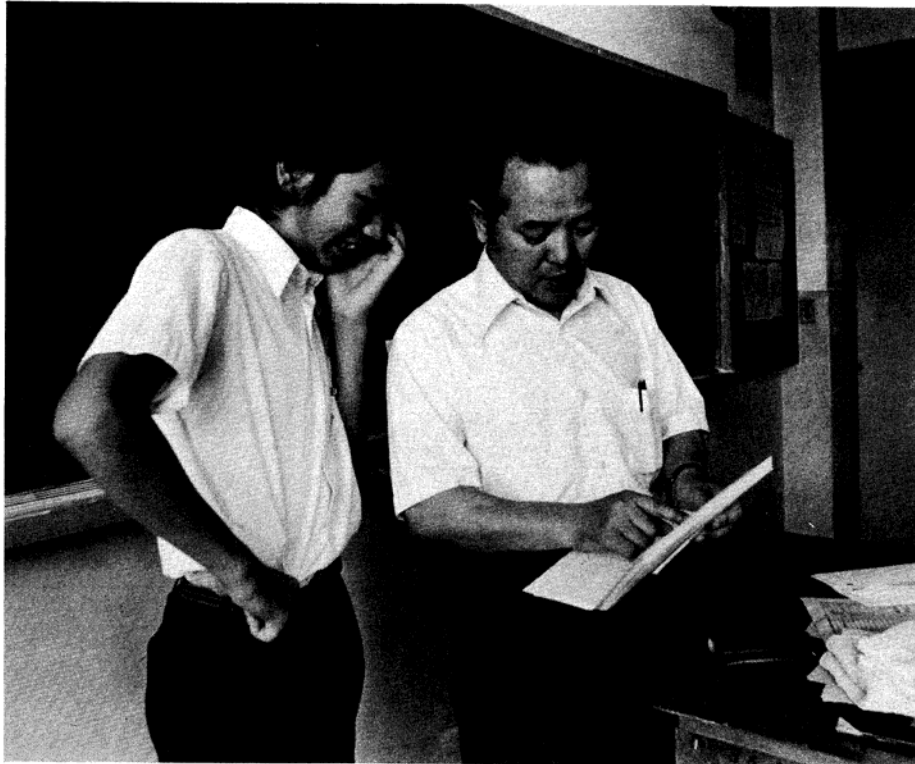


③ 成績により、大きな開きのある属性＝成績のよい子は、1 頼りになるし、2 ねばり強いが、不振ぎみの子は、1 頼りなく、2 あきっぱい性格の持ち主である。
 こうした結果を要約すると、生徒たちの描く学業不振の生徒像は、

	成績優秀の生徒	不振の生徒
1	ねばり強い	あきっぱい
2	がまん強い	がまんができない
3	頼りになる	頼りない
4	細心	大ざっぱ

の通りとなる。中学時代にある程度の成績をとるためには、見たいものをがまんする禁欲的な態度を持続することが不可欠であり、好き勝手なことをしていたら、学業不振に陥るのも止むを得ないという見方である。

Ⅱ章 学業不振の心理構造



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

1 学業成績と自己像

怠けていれば
成績が下がる

これまで、学業不振の生徒に対する評価を、他者の目を通じて考察してきた。そこで、生徒たちが、学業成績の良し悪しを、どの程度、主体的に受けとめているかに、分析の焦点を移すことにしたい。

生徒たちに7つの活動領域を示して「勉強のことをまったく気にしないで、次のようなことを好きなだけ時間を使ったとしたら、あなたの成績は、どのくらいになると思いますか」と尋ねてみた。

表12に掲げたように、テレビやマンガを好きなだけ見たり、ラジオを好きなだけ聞いたりしていたのでは、成績は「下の方」になるというのが、生徒たちの平均的な反応であった。しかし、表12の結果は、生徒集団をトータルとしてとらえたものであるので、「マンガ雑誌を好きなだけ読んだら」に例をとって、成績が低下する範囲を、学業成績別に推定させると表13の通りとなる。

表13の結果から、「トップクラス」=1、「ずっと下」=7に換算して、平均値を算出すると、自己評価が「トップクラス」の生徒で3.6=「やや上」、「上の方」で4.9=「やや下の方」ぐらいまで、成績が低下するという計算になる。そして、「トップクラス」を例にすれば、マンガを好きなだけ見ていて、現在の成績をほぼ維持できると考えている生徒は3.6%「上の方」に属する生徒だと、17%程度にすぎない。表11にふれた他人に対する

表12 好きなだけ～していたら成績はどうか (%)

成績	トップクラス～ やや上の方になる	中くらい になる	やや下の方 になる	下の方～ずっと下 になる	平均値
好きなテレビをみる	7.7	16.1	24.3	51.9	5.38
マンガ雑誌をよむ	7.4	20.1	25.4	47.1	5.27
好きなラジオをきく	8.5	20.6	25.7	45.2	5.24
好きなだけ寝る	8.4	25.2	24.8	41.6	5.14
趣味や特技に熱中	13.4	30.6	25.9	30.1	4.76
友だちと交流	15.2	34.5	23.0	27.3	4.65
クラブ活動に熱中	14.1	37.2	21.8	26.9	4.64

※尺度
 トップクラス 1 上の方 2 やや上 3 中くらい 4 やや下 5 下の方 6 ずっと下 7

表13 マンガを好きなだけ読むと成績 (%)

下がる範囲 自己評価	変化する							変化		
	トップ クラス	上の方	やや 上	中くらい	やや 下	下の方	ずっと 下	上がる	変わらず	下がる
トップ クラス	21.8	14.5	8.7	18.9	15.9	13.0	7.2	—	21.7	78.3
上の方	0.8	3.8	12.8	20.3	24.0	24.8	13.5	0.8	3.8	95.4
やや上	0.4	0.4	4.5	17.0	32.2	25.9	19.6	0.8	4.5	94.7
中くらい	1.7	1.0	2.5	20.6	26.0	27.1	21.1	5.2	20.6	74.2
やや下	0.9	0.9	2.3	12.4	28.0	34.8	20.7	16.5	28.0	55.5
下の方	0.9	0.4	3.1	9.2	19.2	37.6	29.7	32.7	37.6	29.7
ずっと下	3.2	1.9	1.9	11.6	9.7	24.5	47.2	52.9	47.1	—

評価だけでなく、自分自身についても、学業成績を支えるのが努力で、怠けていたのでは、よい成績をとれないという見方が定着している。つまり、努力や禁欲の成果がよい結果に反映されるというのである。

成績の良し悪しは、自信に連なる

そこで、10の領域を示して、「あなたの成績がいまよりグンとよくなったら、次のようなことは、どのくらい変わると思いますか」と尋ねてみた。

表14に示したように、生徒たちによると、成績がよくなることにより、気持ちが変わる領域と変わらない領域とがある。

- ① 気持ちがかなり変わる領域 = 1.自分自身に自信が持てるようになるだけでなく、2.勉

表14 成績がよくなったら、気持ちが変わるか

(%)

	POSITIVE			変わら ない	NEGATIVE		
	とても	かなり	やや		少 し	かなり	とても
1) あなたの自信	14.8	18.2	37.0	24.1	2.5	0.9	2.5
	(70.0)				5.9		
2) 勉強時間	10.3	20.1	38.1	24.0	4.7	0.6	2.2
	(68.5)				7.5		
3) 親に叱られる回数	16.1	9.9	25.4	38.9	5.3	2.5	1.9
	(51.4)				9.7		
4) 先生との話しやすさ	10.7	11.3	28.9	44.3	2.0	0.7	2.1
	(50.9)				4.8		
5) 学級委員に選ばれる	5.5	9.1	33.7	44.0	2.5	0.8	4.4
	(48.3)				7.7		
6) クラブ活動のしやすさ	10.7	7.7	13.8	(54.5)	5.6	2.0	5.7
	32.2				13.3		
7) 友だちづきあい	10.0	6.9	13.2	(50.5)	10.2	3.4	5.8
	30.1				19.4		
8) 親友の数	6.1	5.3	14.1	(62.2)	8.2	1.5	2.6
	25.5				12.3		
9) クラスでの人気	3.2	4.5	20.5	(60.4)	5.1	1.9	4.4
	28.2				11.4		
10) 他の人の成績	16.7	12.9	26.3	31.1	5.5	1.1	6.4
	(55.9)				13.0		

注) (POSITIVE, NEGATIVE の内容については巻末の調査票4-(1)~(10)に詳しい。例えば、自信がでる (POSITIVE)、自信がなくなる (NEGATIVE)

強時間も長くなる。

- ② 気持ちがやや変わる領域=1.親に叱られる回数が減り、2.先生と話しやすさがやや増し、3.学級委員に選ばれる割合が増え、4.他人の成績が気になるようになる。
- ③ 気持ちが変わらない領域=1.クラブ活動のしやすさ、2.友だちづきあい、3.親友の数、4.クラスの仲間からの人気が変わらない。

それでは、「成績がぐんと悪くなったら」気持ちがどのように変わるのか。(表15)。

- ① 気持ちが暗くなる領域=1.自信がなくなり 2.先生に話しくくなり 3.親に叱られる割合が増える 4.学級委員に選ばれることが減る。
- ② 気持ちが変わらない領域=1.クラブ活動のしやすさ、2.友だちづきあい、3.親友の数、4.クラス仲間からの人気は変わらない。
- ③ がんばろうという気になる領域=1.勉強の時間がやや長くなり、2.他人の成績が気になるようになる。

この表14と表15とを、それぞれ、積極的(POSITIVE)、変わらない(NEUTRAL)、消極的(NEGATIVE)とに分けて、図化してみたのが、図2と図3である。

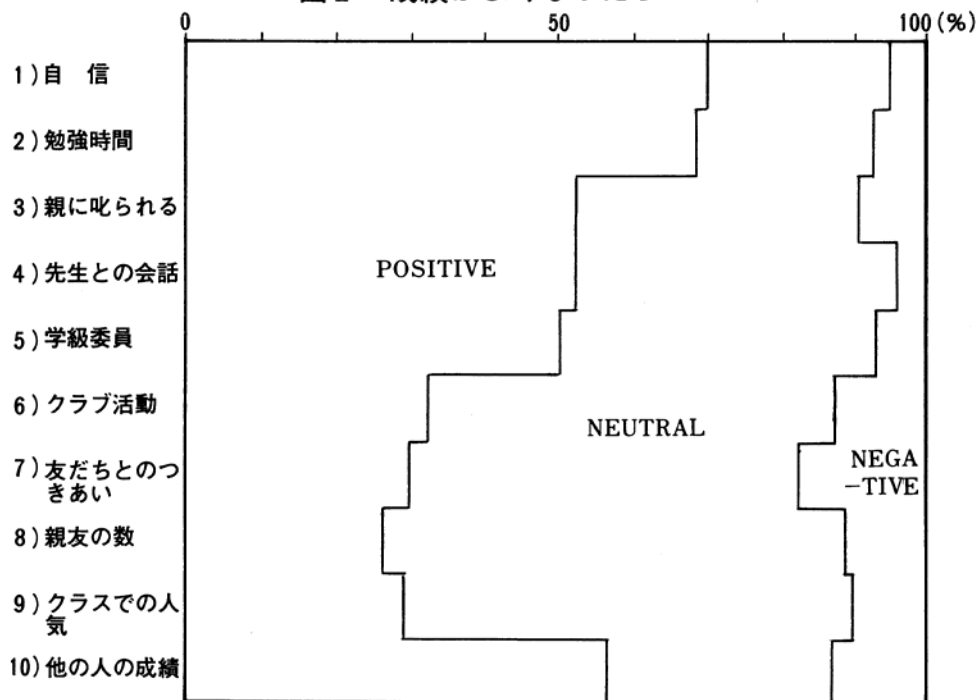
図から明らかのように、生徒たちは、他の面はともあれ、成績がよくなることにより、最も変わるのが、自分に自信を持てるようになる点で、逆に、成績が悪くなると、自信が失われると答えている。つまり、成績の良し悪しは、なによりも、生徒自身の自信につながるものらしい。成績のよい子は、学習努力がよい成果をもたらすので、自分に対して誇

表15 成績がぐんと悪くなったら

(%)

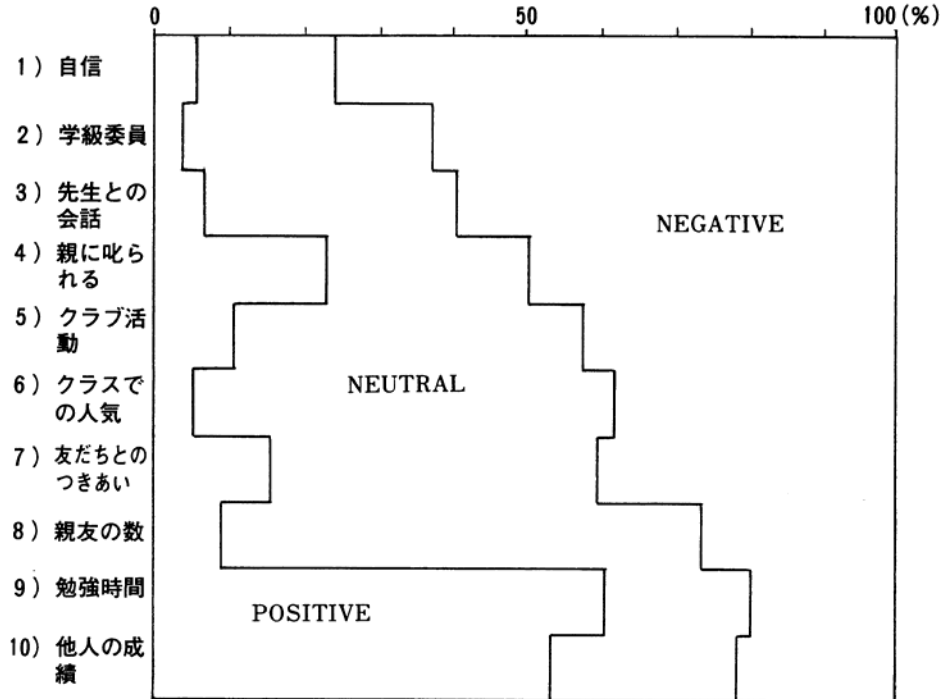
	POSITIVE			変わら ない	NEGATIVE		
	とても	かなり	やや		少し	かなり	とても
1) あなたの自信	2.0	0.6	2.1	18.5	26.6	22.3	27.9
	4.7				76.8		
2) 学級委員に選ばれる	1.5	0.6	1.5	34.8	21.5	14.4	25.6
	3.6				61.6		
3) 先生との話しやすさ	2.3	1.6	2.3	36.1	28.5	13.9	15.3
	6.2				57.7		
4) 親に叱られる回数	4.7	8.2	8.9	28.5	15.8	15.5	18.4
	21.8				49.7		
5) クラブ活動	4.8	2.2	2.9	48.8	19.6	9.7	12.0
	9.9				41.3		
6) クラスでの人気	1.7	0.7	2.5	57.9	20.6	7.9	8.7
	4.9				37.2		
7) 友だちつきあい	6.3	3.1	4.8	46.4	22.9	7.3	9.2
	14.2				39.4		
8) 親友の数	3.3	1.3	3.0	66.7	17.8	4.0	3.9
	7.6				25.7		
9) 勉強時間	15.6	19.8	26.4	18.8	8.2	5.6	5.6
	61.8				19.4		
10) 他の人の成績	22.7	12.8	18.0	25.1	8.1	4.2	9.1
	53.5				21.4		

図2 成績がよくなったら



りを持つことができる。それに対し、学業不振ぎみの子は、努力が実を結ばないので、だめな自分という自己像を持ちがちになる。

図3 成績がぐんと悪くなったら



2 学業不振ぎみの生徒の心情

学業成績のよい生徒は、すべてに自信を持つ

これらの分析結果を手がかりとして考えると、学業成績によって、生徒たちの自己像が大きく規定されている可能性が強い。

そうした可能性を検討しようとして作成したのが、表16である。

これは、成績の自己評価別に、その他の領域についての自信とクロス集計した結果を示している。この中で、注目をひくのは、成績が「トップクラス」の生徒が、すべての点に自信を持っていることで、彼らは「成績のよさ」はむろんのこと「スポーツ」「スタイル」「友だちからの人気」などのあらゆる面で「自分に自信がある」と答えている。

常識的に考えると、数学や英語が得意なのと、ファッションのセンスやスポーツの腕前とは関係がないと思われるのに、「トップクラス」の生徒たちは、そうした領域についても「誰にも負けない」と信じている。学級内での人気を独占するばかりの勢いである。

「トップクラス」との間にはかなりの開きが認められるが、成績が「上の方」の生徒も、「トップクラス」の生徒に次いで、多くの領域で、自信を示している。そして、成績が「やや上」「中くらい」「やや下」へと、成績が下位へ移るにつれて、自信が失われていく。

調査票の作成にあたって、筆者たちは、学業成績とスポーツやスタイル、ファッションのセンスなどとの間には、相関が薄いと仮定していた。つまり、学級の中に、成績で自信を持つ生徒もいれば、スポーツのヒーローもいる。あるいは、ゴシップ通もいるというように、リーダーシップの持ち主が多様化しているのではないかと予想していた。しかし、残念ながら、表16の結果によると、「トップクラス」の生徒が、すべてに自信を持ち、その下に「上の方」の生徒が位置するというように、成績と自信との間に、画一的といえるほ

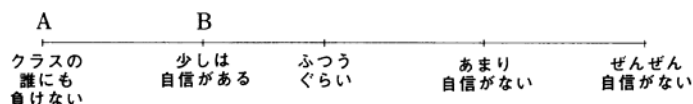
表16 学業成績と自己評価

(%)

	トップ クラス	上の方	やや上	中くらい	やや下	下の方	ずっと下	サンプル 平均
趣味	36.2 (50.7)	9.0 (29.3)	5.6 (22.0)	6.0 (20.7)	7.6 (22.7)	7.0 (17.1)	11.9 (23.2)	8.4 (22.9)
成績の良さ	29.4 (76.5)	2.3 (48.2)	0.5 (20.9)	1.0 (7.1)	0.3 (2.9)	0.4 (0.4)	4.0 (4.7)	2.2 (12.8)
ファッション のセンス	29.0 (34.8)	3.8 (17.3)	3.2 (11.3)	3.9 (12.9)	4.1 (13.1)	2.6 (16.6)	9.0 (18.4)	5.1 (14.8)
スポーツ	26.1 (52.2)	8.3 (38.4)	5.4 (36.9)	3.7 (30.2)	2.0 (27.6)	3.0 (26.0)	10.5 (23.6)	5.3 (30.6)
スタイル	25.0 (29.4)	4.5 (14.3)	3.2 (10.4)	3.9 (9.3)	2.6 (7.0)	2.6 (7.0)	10.3 (11.6)	4.8 (10.0)
楽器のうで前	22.1 (95.6)	4.5 (27.8)	3.6 (24.4)	3.1 (20.2)	1.2 (19.5)	0.9 (16.6)	7.2 (13.7)	3.7 (21.1)
友からの人気	21.7 (46.4)	4.5 (21.8)	1.8 (15.3)	1.9 (12.2)	0.9 (8.7)	1.3 (7.4)	5.9 (11.2)	2.9 (13.0)
読書の量	11.7 (44.9)	6.0 (21.8)	4.1 (20.8)	2.2 (14.6)	3.2 (14.3)	3.5 (10.9)	6.5 (17.5)	4.3 (16.9)
スターのうわ さ	5.9 (34.7)	2.3 (21.8)	2.3 (21.7)	2.4 (15.8)	1.4 (16.2)	2.2 (15.7)	9.7 (25.9)	3.3 (18.7)

注) 表中の数値は、下の尺度でAの占める割合。()はBを含む。

例えば、成績がトップクラスの生徒のうち、趣味にとっても自信を持つ子が36.2%占めるとい
う意味。



どの相関がみられる。そうした中で、予想外だったのは、今までの考察通りに推移すれば、
もっとも自信を喪失するはずの成績が「ずっと下」の生徒が、「上の方」の生徒と同じ程
度に自分自身に自信を持っている事実だった。

上記の傾向を、そのまま受け取るなら、生徒たちの中で暗い自己像を抱いているのは、
成績が「中くらい」から「下の方」の生徒で、「トップクラス」や「上の方」はともあれ、
「ずっと下」の生徒も意外に自己像が明るいことになる。ということは、すでにふれた「学
業成績の不振が精神的歪みを強く与えた時、その生徒を学業不振と名づける」と考えた発
想からすると、「ずっと下」に属する生徒たちは、形態的に学業不振であっても、心理的に
不振に陥っていないことにもなる。しかし、こうした解釈は、経験的な事象とあまりにかけ
離れているように思われる。

**成績不振群は進
学を断念してい
る**

つまり、成績が最下位群の生徒たちの自己像がそれほど暗くないのは事実としても、成績が「トップクラス」から「上の方」「や
やや上」と成績階層が下がるにつれて、自信が失われた全般的な傾
向を想起すると、単純に最下層の生徒が明るい結論づけにくい
ものを感じる。

表17に、学業成績別に、家庭学習時間の長さを示した。もちろん、表中の数値は、生徒
たち自身の評価であるから、それが、そのまま、家庭学習の長さを意味するのではないのは

表17 学業成績と家庭学習時間

(%)

時間 自己評価	4時間 以上	3時間 ぐらい	2時間 ぐらい	1時間 ぐらい	ほとんど しない	平均時間
トップクラス	23.2	8.7	29.0	21.7	17.4	2時間0分
上の方	6.8	23.3	36.0	22.6	11.3	1時間55分
やや上	3.6	13.4	44.7	25.4	12.9	1時間42分
中くらい	1.9	12.5	42.1	28.3	15.2	1時間36分
やや下	2.6	13.5	42.9	28.0	13.0	1時間40分
下の方	2.2	8.3	29.8	32.5	27.2	1時間16分
ずっと下	3.2	4.5	29.8	26.0	36.5	1時間6分
全体	3.6	12.2	38.9	27.5	17.8	1時間34分

確かだが、成績階層が下がるにつれて、当然のことながら、学習時間が短くなり、「ずっと下」に属する生徒の場合、37.7%が、「ほとんど勉強していない」と答えている。

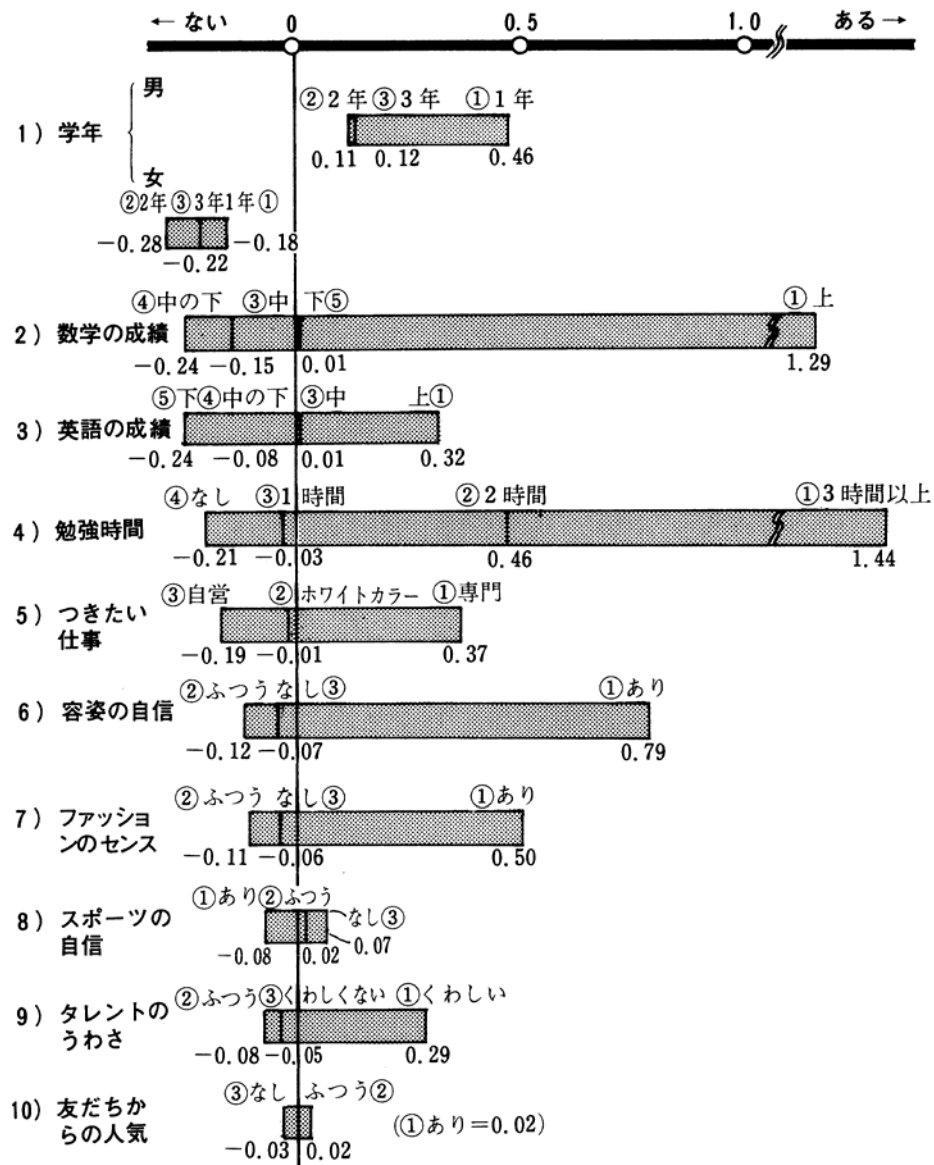
従って、成績が「ずっと下」の生徒の場合、学力競争から完全に離脱し、そうした束縛から解放された開き直りにも似た感じが、自己評価が暗くなるのを救っているのかもしれない。しかし、開き直りには、それ相当の影が認められるのではないか。なぜなら、生徒たちは、よい成績をとることが、いわゆる一流高校への入学、そして、有名大学への進学を可能にし、それが、安定した生活へ通ずると信じているのであるから、そうした競争からの離脱は、未来の生活を断念することを意味しているのではないか。

こうした仮説が正しいとするなら、成績が下層の生徒たちの反応は、未来への希望を失った刹那主義にも似た感情の発露といえなくもない。そうした仮説の正しさを確かめるために、生徒たちの未来像と学業成績との関係とを分析してみた。

中学を卒業すれば、高校入学、そして、その後、大学進学が控えている。未来像の第一歩として、一流大学への入学可能性と成績との関係を示すと、表18の通りとなる。例によって、成績が「トップクラス」の生徒のうち半数近い者が、入学の可能性を信じている。しかし、成績が「上の方」から「中くらい」の生徒は、「もしかしたら入れる」程度の見通ししか抱けなくなり、「やや下」以下の生徒ともなると、その大半が、「入学はまず不可能だろう」と考えている。

このデータの中では、先ほどまでの分析の中で、自己評価が暗くなかった成績の「ずっと下」層の生徒が、一流大学進学を完全に断念しているのが注目をひく。「ぜったい入れない」と思っている55.1%を含めて、断念組の占める割合が84.6%に達しているのである。もちろん、図4に、数量化Ⅱ類を利用して入学見通しを支える属性分析を行った結果を示したので明らかなように、入学見通しが、成績の他に、学年や性別、勉強時間などの影響を受けているのはたしかであろう。すなわち、学年に着目すれば、大学入試のむずかしさのわからない1年生が、もっとも明るい見通しを抱き、3年生になるにつれ入学に自信を持てなくなる。また、男子より女子の方に、自信を持っていない者の占める割合が大きい。しかし、この分析に使用した「スタイルのよさ」「ファッションのセンス」「勉強時間」などの自己評価が、すでにふれたように、学業成績の良し悪しに支えられていることを考える

図4 一流大学への入学可能性と属性



と、学業成績の持つ重みは、図から認められる以上に大きいと評価するのが妥当であろう。

学業不振群の未来像は暗い

このように、大学進学についての見通しが学業成績に規定されており、現在の文脈に則していうなら、学業成績が「ずっと下」層の生徒が、進学意欲をほとんど失っているのは確かであった。そこで、もう少し、分析を進め、成人してからどんな生活を送れるのか、と成績との関連を考察することにしよう。なお、分析に使った項目は、表19の通りである。

表19の中から「まあ」「ぜったい」なれないと答えた生徒の割合を学業成績別にクロス集計をすると、表20のような結果が得られる。表20の上位2項目、つまり、「社会的に重要な仕事をする人」「社会的に尊敬され権威を持つ人」を例にとって、見やすく図化した

表18 一流大学を入れるかと成績

(%)

	ぜったい たぶん 入れる	もしかしたら 入れる	まあ ぜったい 入れない
トップクラス	$\frac{28.4}{19.4}$ 47.4	32.8	$\frac{13.4}{6.0}$ 19.4
上の方	$\frac{5.3}{15.8}$ 21.1	52.6	$\frac{23.3}{3.0}$ 26.3
やや上	$\frac{1.8}{4.5}$ 6.3	51.3	$\frac{33.9}{8.5}$ 42.4
中くらい	$\frac{2.2}{3.9}$ 6.1	47.3	$\frac{36.7}{9.9}$ 46.6
やや下	$\frac{1.9}{2.9}$ 4.8	30.1	$\frac{48.3}{16.8}$ 65.1
下の方	$\frac{2.2}{0.}$ 2.2	22.3	$\frac{44.5}{31.0}$ 75.5
ずっと下	$\frac{3.8}{1.3}$ 5.1	10.3	$\frac{29.5}{55.1}$ 84.6
全体	$\frac{3.4}{4.5}$ 7.9	37.8	$\frac{39.1}{17.2}$ 54.3

表19 自分自身の未来像

(%)

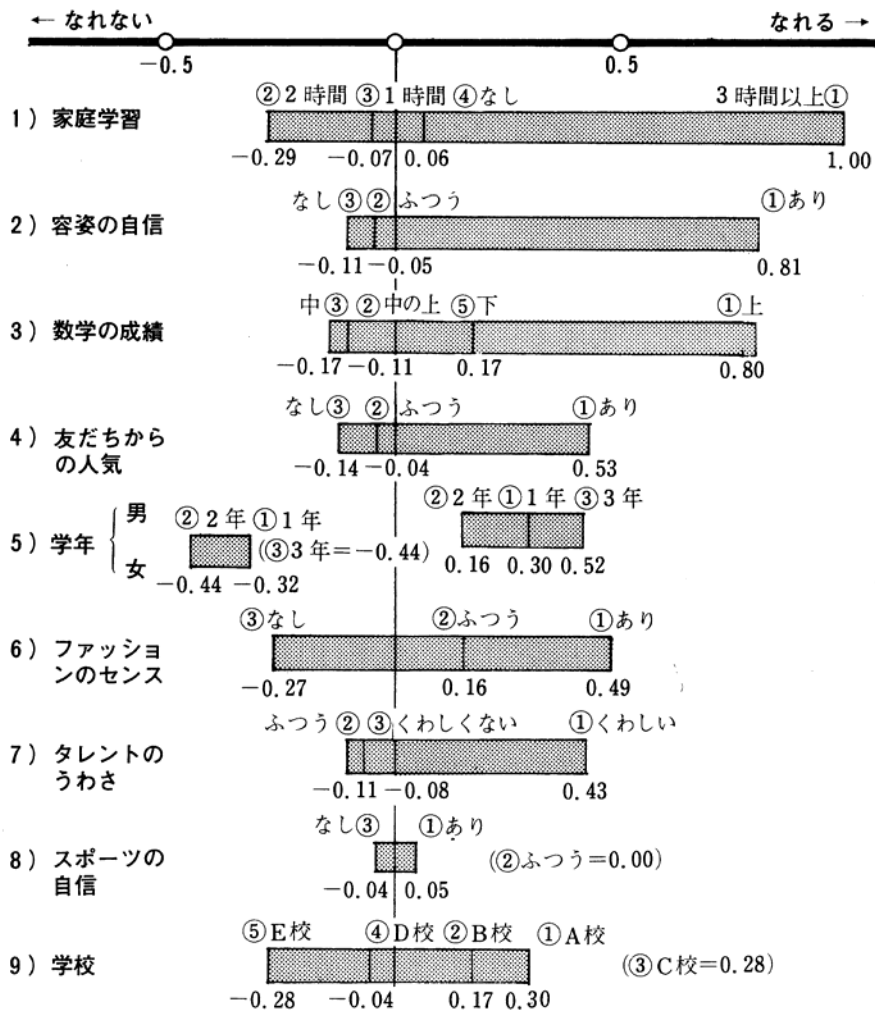
未来像	尺度		もしかしたら なれるかも	まあ	ぜったい なれない
	ぜったい なれる	たぶん			
① 社会的に尊敬され、権威を持った人に	$\frac{4.0}{5.8}$ 9.8	36.2	$\frac{44.3}{9.7}$ 54.0		
② お金持ちになって、広い家に住む人に	$\frac{4.8}{4.1}$ 8.9	43.7	$\frac{37.8}{9.6}$ 47.4		
③ 社会的に重要な仕事をして、社会の役に立つ人に	$\frac{3.9}{6.3}$ 7.2	43.0	$\frac{39.4}{7.4}$ 46.8		
④ 芸術家やスポーツ選手など自分の才能を生かしていく人に	$\frac{6.9}{11.5}$ 18.4	44.1	$\frac{29.5}{8.0}$ 37.5		
⑤ まじめにコツコツと地味な仕事を続けて、みんなの生活を支える人に	$\frac{8.3}{19.5}$ 27.8	50.7	$\frac{16.6}{11.9}$ 21.5		
⑥ みんなから親しまれ、好かれる人に	$\frac{6.2}{19.8}$ 26.0	60.1	$\frac{11.3}{2.6}$ 13.9		
⑦ いいお父さん(お母さん)に	$\frac{13.3}{32.2}$ 45.5	44.8	$\frac{6.4}{3.3}$ 9.7		

表21 なりたい職業と成績の自己評価

(%)

職業 自己評価	専門職 管理職	セ ミ 専門職	教 員	ホワイト カラー	販売・ 自営	タレント	スポーツ 選手	その他
トップ クラス	25.0	5.0	13.3	16.7	10.0	10.0	10.0	10.0
上の方	11.0	11.9	21.2	17.7	8.5	5.1	3.4	21.2
やや上	9.1	6.6	24.2	17.7	14.1	6.6	7.6	14.1
中くらい	4.7	9.4	20.9	22.9	15.5	7.2	6.0	13.4
やや下	4.0	10.9	16.4	22.0	20.1	4.7	6.6	15.3
下の方	4.3	13.2	16.5	17.1	18.8	9.3	6.0	14.8
ずっと下	6.2	5.3	12.3	18.4	29.7	13.2	3.5	11.4
全 体	6.7	9.5	18.9	20.2	16.9	7.3	6.1	14.4

図6 社会的に権威のあるおとなになると属性



のが、**図5**である。

図が示すように、「社会的に重要な仕事をする人」になるのを断念している生徒の割合は「トップクラス」層が**19%**にすぎないのに、「上の方」層 **32%**、「やや上」層 **35%**と、成績が下がるにつれて、断念する者の占める割合が高まり、「ずっと下」層ともなると、断念率は**66%**に達している。また、「ずっと下」層が「社会的に尊敬され、権威を持つ人」になるのを、断念している割合も、**72%**である。

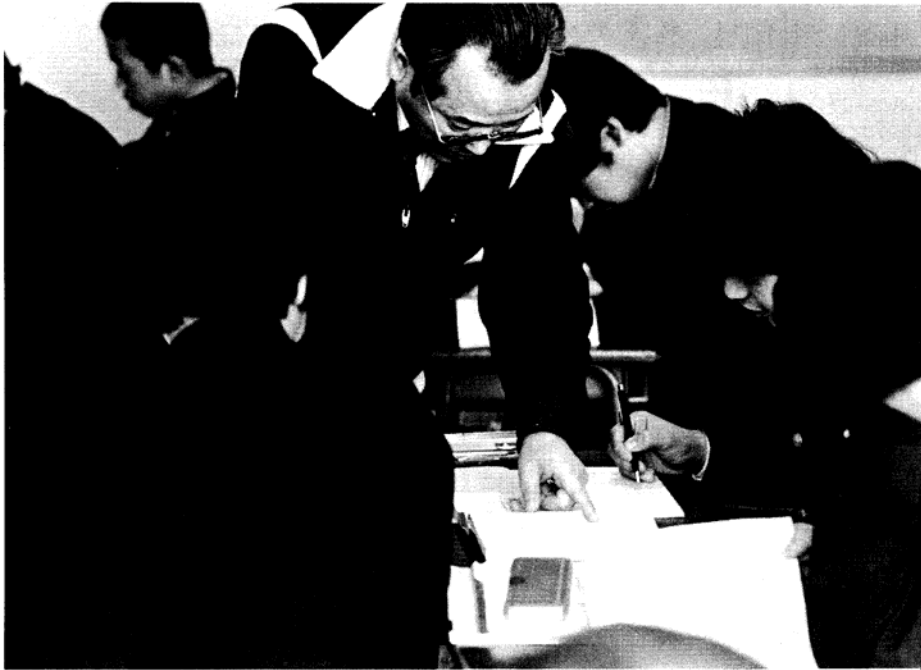
その他、学業成績との関係が薄いと思われる「よい父(母)親になれる」や「みんなから親しまれ好かれる人になる」についても、**表20**の下欄右の欄のように、「下」および「ずっと下」層の断念率が異常に高い数値を示している。

こうした事実をふまえると、先に提出した仮説、すなわち、学業成績不振群の自我像が、明るさを見せたのは、未来への希望を放棄した開き直りで、心の奥底には、あきらめにも似た不安感がただよっているのではないかという仮説が、現実味を帯びて来たといわざるをえない。なにしろ、「下の方」および「ずっと下」層に属する生徒の**6割**が、すでに中学生のうちから、社会的な権威や重要な仕事につけそうもないと思っているのである。

事実、**表21**の「将来つきたい仕事と学業成績」とのクロス集計結果が示す通り、専門・管理職＝「トップクラス」層、教員＝「上の方」および「やや上」層、ホワイトカラー＝「中くらい」および「やや下」層、販売・自営＝「やや下」層以下、タレント＝「ずっと下」層、のように成績とつきたい仕事との間に、教育社会学のテキストを見るような相関が存在している。

なお、**図6**に、「社会的に権威のあるおとなになれる」を規定する要因を分析した結果を示した。「権威のあるおとなになれる」と思っている生徒の属性は、図から明らかのように、①勉強時間の長い、②成績のよい、③すべての面に自信を持つ、④3年生の、⑤男子の子であった。それに対して、権威への到達を断念している生徒の属性は、自分に自信を失っている生徒という輪郭がうかび上がってきたものの、いまひとつのシャープさに欠ける。つまり、それだけ、自信を失っている生徒の占める割合が多く、自信を持つ少数の生徒が突起しているということなのであろう。本号のテーマからはそれるが、そうした意味では、学業成績の秀れた生徒たちの自信にみちあふれた、というより、過信ともいえるような態度が目につくデータである。

Ⅲ章 学業不振をとりまく病理



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

1 学業不振と疎外感

トップとラスト
に疎外感がみ
られる

今までふれてきたように、学業成績の良し悪しは、生徒たちの意識を強く規定していた。そこで、中間的なまとめの意味を含めて、各々の成績階層に属する生徒たちの心情を要約して紹介する

- ①「トップクラス」層（4%）＝将来の見通しも明るく、勉強をはじめあらゆる面で自信にみちた生活を送っている生徒
- ②「上の方」から「やや上」の層（20%）＝「トップクラス」層ほどの手放しの明るさは認められないが、それなりの自信を持って頑張っている生徒
- ③「中くらい」から「やや下」の層（54%）＝現在の自分に自信を失いかけてはいるが、未来については、まだ絶望していない生徒
- ④「下の方」の層（13%）＝学力競争で下位に低迷していることから、自信を喪失し、未来の暗さを予感している生徒
- ⑤「ずっと下」の層（9%）＝学力競争から離脱し、開き直りにも似た解放感が認められるが、おとなになることへの不安が強い刹那的な生活を送っている生徒
- の通りとなる。従って、精神的に充足感を抱いて学校生活を送っている生徒は、素直に捉えたと「やや上」層までの24%、狭く捉えるなら「トップクラス」層の4%までで、その他の生徒は、成績不振のもたらす暗さに思い悩んでいる計算になる。そう考えると、生徒

集団の4分の3、やや誇張した表現をするなら、「トップクラス」層以外の96%が、程度の差こそあれ、学業不振の生徒といえなくもない。そうした中で、特に、下位に属する2割の生徒の心が、暗く閉ざされているのが目につく。

そこで、学業不振の質を捉えるために、分析をもう少し進めて、そうした暗さが、環境に対する疎外感などの病理的な傾向を伴うところまで進展しているかどうかを考えてみたい。

表22に仲間や親、教師との間の疎外感の有無を調べた単純集計の結果を示した。「仲間はずれになっている」や「親が自分のことをわかってくれない」などという気持ちを抱いている生徒は、10~15%で、6~7割の生徒は、疎外感を味わっていないのがわかる。そこで「とても」と「かなり」そう思う者に対象を限定して疎外感と学業成績との間の関連

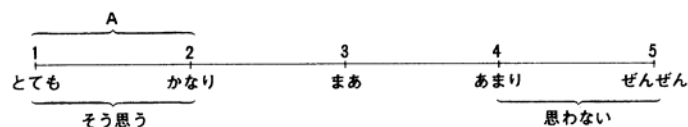
表22 環境に対する疎外感 (%)

	とても そう思う	かなり そう思う	まあ そう思う	あまり ぜんぜん そう思わない
親は、あまり自分のことをわかってくれない	7.5	8.5	20.3	37.9 25.8 63.7
親は、自分に無理な期待を持ちすぎる	6.8	4.9	19.3	39.6 29.4 69.0
先生となんとなく話しにくい気持ちがある	6.6	5.8	22.5	40.9 24.2 65.1
クラスの友だちは、自分に対してばかにしているところがある	4.5	5.6	18.8	46.3 24.8 71.1
クラスで、自分だけ仲間はずれになっていると思うところがある	4.3	3.6	14.2	46.5 31.4 77.9

表23 疎外感と学業成績 (%)

	ク ト ラ ッ ス プ	上 の 方	や や 上	中 く ら い	や や 下	下 の 方	ず っ と 下
親は自分のことをわかってくれない	26.0	10.5	15.6	13.9	13.9	14.6	29.5
親は無理な期待をかける	27.5	11.5	10.5	9.2	8.4	13.0	21.2
先生と話しにくい	22.0	10.6	9.4	8.5	10.1	16.7	22.7
クラスの友だちがばかにする	25.5	7.4	8.6	6.8	6.7	11.9	23.7
クラスで自分だけ仲間はずれ	20.6	4.5	6.3	6.1	6.1	7.4	19.1

表中の数値は、尺度のAの部分全体の中で占める割合



を調べると、表23のような結果が得られる。

数値から明らかなように、「トップクラス」層と「ずっと下」層の両極に属する生徒の疎外感がきわめて高く、成績段階が「上の方」から「下の方」までの生徒は比較的安定した気持ちを示している。

しかし、疎外感の強い「トップクラス」層と「ずっと下」層との間では、図8に「クラ

スでの仲間はずれ」と「親が無理な期待をかけすぎる」に例をとって、プロフィールを示したので明らかなように、「トップクラス」層の場合、疎外感をまったくといっていいほど味わっていない者が4割、感じている者が2割と、全体としては、適応している生徒の比率が高い。しかし、「ずっと下」層の場合、両者の割合がほぼ等しい。つまり、それだけ「ずっと下」層の生徒の疎外感の方が深刻なのであろう。いずれにせよ、たとえ2割にしても「トップクラス」層の生徒の中に、疎外を感じている生徒がいるのは注目に値する傾向である。

しかし、サンプルを全体として捉えた時、「トップクラス」層で、疎外感を味わっているのは、4%（「トップクラス」層の占める割合）の中の2割、すなわち、1%弱の比率になる。従って数量化Ⅱ類を使って、「仲間はずれになっている」と感じる要因分析を試みた結果では、図7のように、成績が下位層の方に、疎外感を味わっている生徒が多い、というデータが得られている。

図7 仲間はずれになっていると感じる

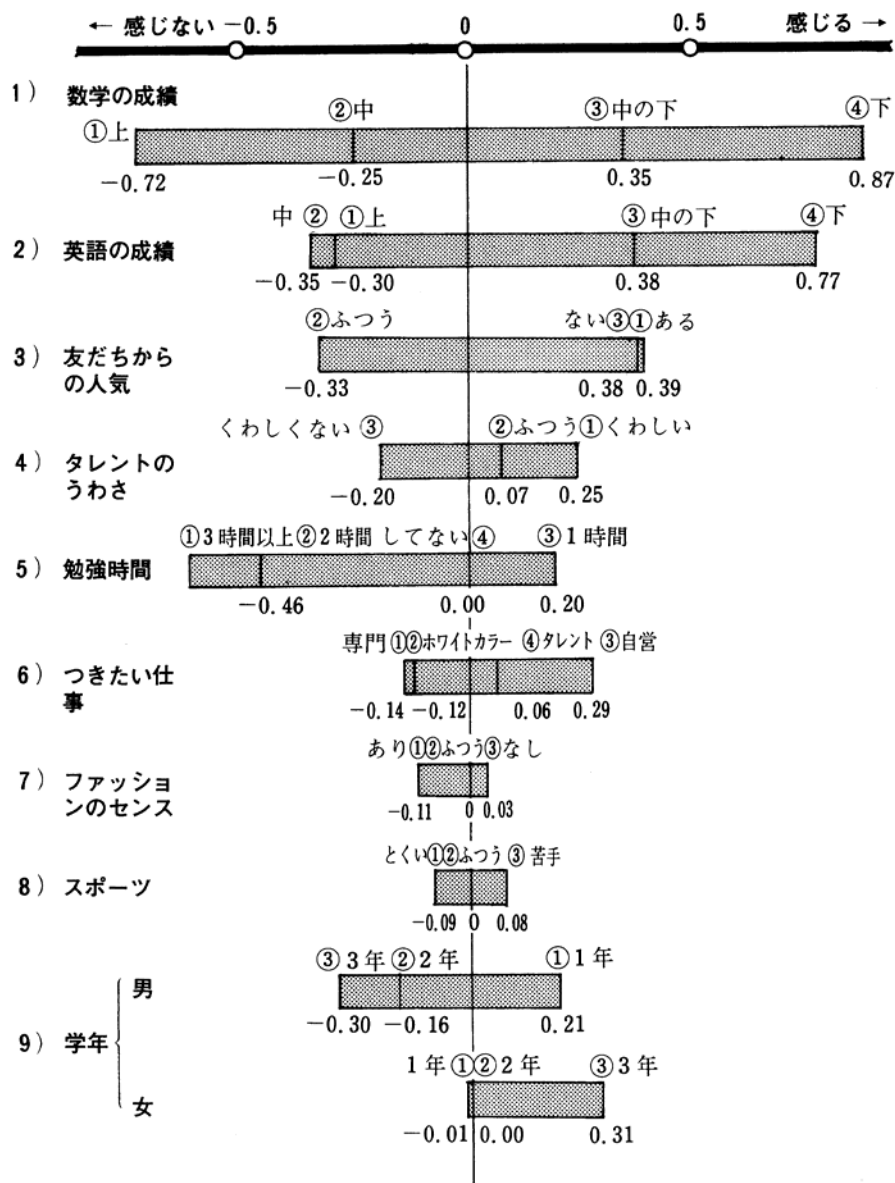
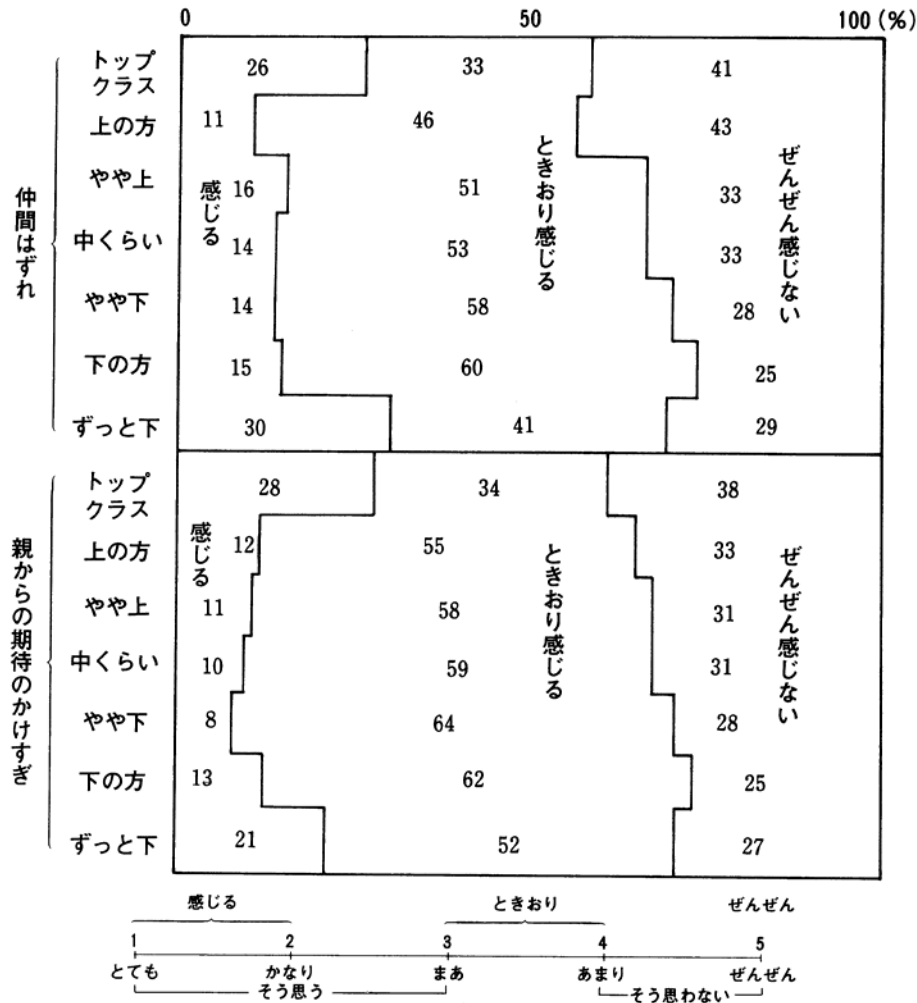


図8 疎外感と学業成績



2 不適応状態と学業不振

学業不振の生徒に空虚感が目につく

ここで、表24に目を通してほしい。これは、疎外感より、もう一歩掘り下げて、生徒たちが現実逃避の気持ちを抱いているかどうかを尋ねたもので、その結果によると「小さいころの自分が幸せだった」と思う生徒が35.6%などを始め「ふと、このまま死んでしまいたい」の18.8%まで、2～3割の生徒が環境に対して不適応状態を呈しているのがわかる。

もちろん、こうした生徒たちの心情の背景はさまざまで、一義的に捉えるのは妥当ではあるまい。しかし、本号の主題である「学業成績」に着目して、クロス集計を行うと、表25および図9のような結果が得られる。

詳しい結果は、図表を参照してほしいが、いずれのデータとも、

- ① 相対的に精神が安定しているのは、学業成績が「上の方」から「中くらい」までに属する生徒である。

表24 現実逃避願望の芽ばえ

(%)

項目	尺度				
	しょっちゅうある	時々ある	たまにある	一、二度はある	まったくない
① 小さい頃を思うと、あのころの自分は幸せだったなあと思うことがある	19.0	16.6	22.7	17.1	24.6
	35.6		44.8		
② 一人で、どこか遠くへ行ってしまういたいと思うことがある	12.9	18.1	20.3	21.2	27.5
	31.0		41.5		
③ きょうは、学校へ行きたくないと思うことがある	8.9	15.0	28.2	28.8	19.1
	23.9		57.0		
④ このまま、おとなになっていくことが、とても不安だと思うことがある	9.5	15.3	22.5	20.7	32.0
	24.8		43.2		
⑤ 自分なんか生まれてこなければよかったと思うことがある	8.6	10.1	14.4	20.4	46.5
	18.7		34.8		
⑥ ふっと、このまま死んでしまいたいなあと思うことがある	9.2	9.6	12.8	18.3	50.1
	18.8		31.1		

表25 現実逃避の気持ちと成績

(%)

項目 自己評価	小さい頃の方が幸せだった					学校へ行きたくない					自分なんか生まれなければよかった				
	しょっちゅうある	時々ある	たまにある	一、二度はある	まったくない	しょっちゅうある	時々ある	たまにある	一、二度はある	まったくない	しょっちゅうある	時々ある	たまにある	一、二度はある	まったくない
トップクラス	26.1	10.1	14.5	10.1	39.2	17.4	11.6	8.7	17.4	44.9	15.9	7.2	5.8	18.8	52.3
	36.2					29.0					23.1				
上の方	15.2	19.7	18.9	26.5	19.7	6.8	11.3	24.8	39.8	17.3	6.0	9.8	9.8	15.8	58.6
	34.9					18.1					15.8				
やや上	17.9	18.4	19.3	17.0	27.4	5.8	11.2	29.5	30.7	22.8	7.1	7.1	10.7	26.8	48.3
	36.3					17.0					14.2				
中くらい	16.5	15.0	23.5	18.2	26.9	6.9	12.4	27.9	31.0	21.8	6.1	8.1	14.4	20.7	50.7
	31.5					19.3					14.2				
やや下	16.0	18.9	28.5	15.1	21.5	6.1	17.3	29.2	30.9	16.5	7.8	12.8	16.9	20.6	41.9
	34.9					23.4					20.6				
下の方	23.5	18.7	20.0	16.1	21.7	11.7	19.9	32.5	22.5	13.4	9.6	12.2	15.2	22.2	40.8
	42.2					31.6					21.8				
ずっと下	29.0	13.5	20.0	14.8	22.7	21.7	21.0	29.2	18.5	9.6	19.2	12.8	19.9	10.3	37.8
	42.5					42.7					32.0				
全体	18.9	16.7	22.5	17.2	24.7	8.9	14.9	28.1	28.8	19.3	8.6	10.0	14.3	20.3	46.8

図9 死にたいと思う気持ちと学業成績

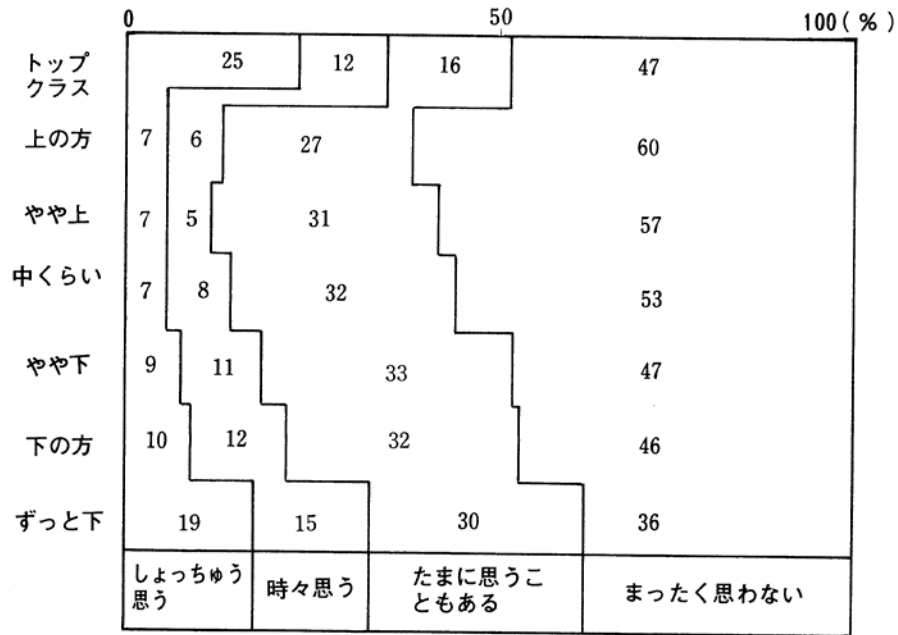
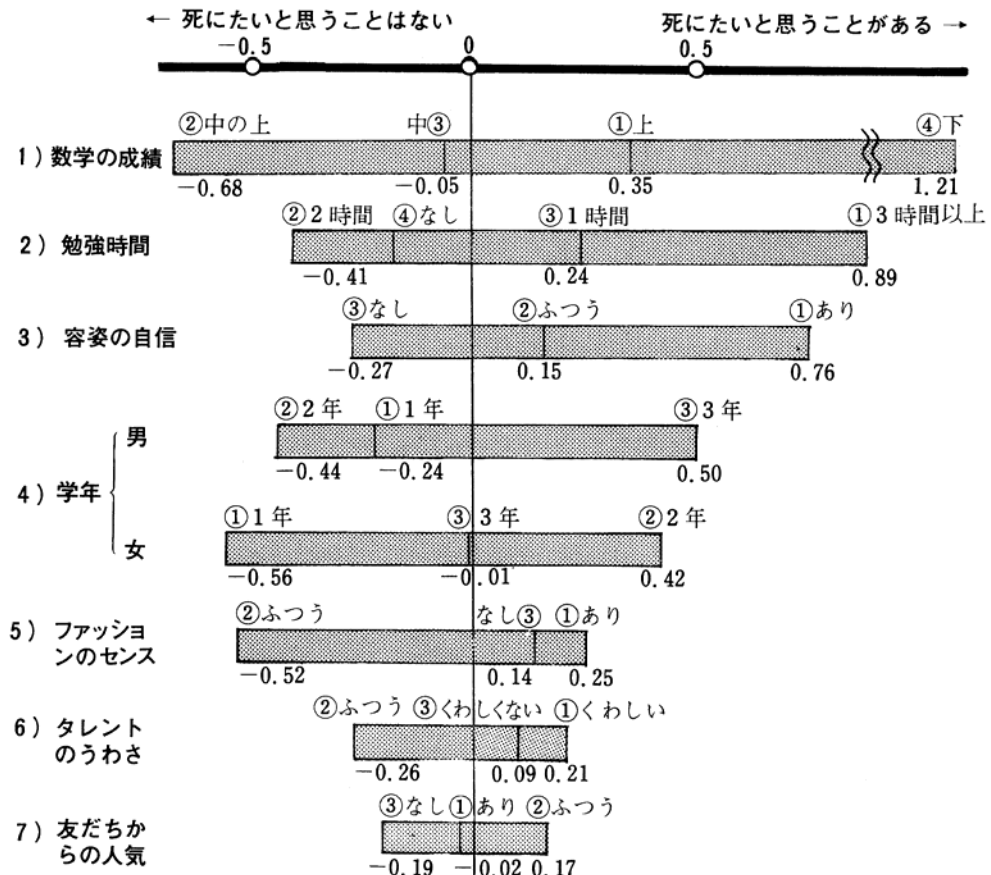


図10 死にたいと思うことがあると属性



② 成績が下がるにつれて不適應を起こす割合が高くなるが、特に、成績が「ずっと下」層の生徒が、精神の不安定を訴える度合いが大きい。

③ 成績が「トップクラス」層の生徒に、不適應感が認められる。
という共通の傾向を示している。

なお、図10に「死にたいと思うことがある」属性を支える要因を数量化Ⅱ類を使って分析した結果を示した。死を急ぐ気持ちは複雑であろうから、こうしたマクロな分析技法になじまないのかもしれない。従って、個々の反応を細かく考察すると理解しにくい面が少なくない。しかし、そうした中で、学業成績の不振（1）－④）が、死にたいと思う気持ちを促進しているのが注目をひく。明るさを装ってはいても、未来に希望を持たないだけに、ふとした機会にみたされぬ気持ちが心をかすめるのであろう。

Ⅳ章 学校改革の手がかりを求めて



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

1 学業成績により両極化

学業不振の生徒は成績の公表に反対

これまで考察してきたように、中学生たちの意識は、学業成績により強く規定され、その中でも特に、成績上位層の生徒に、強い自負心と孤独感が奇妙な形で同居していた。それと同時に、成績下位層の生徒が、自信を喪失し、不適応状況を示しているのも、目につく傾向であった。

もちろん、こうした傾向の背景をマクロに捉えるなら、高校や大学入試に象徴される学歴社会のあり方に関連してくるし、「資格」より「場」を重んじる年功序列型の雇用形態にまで、問題が発展してくる。しかし、そうしたマクロな考察は、本号で扱える範囲を越えているので、思いきって学校内に視野を限定してみたい。

生徒たちに、授業についての希望を尋ねたところ、表26のような結果が得られた。最頻値に○をつけたので明らかなように、生徒たちの平均的な気持ちは、

- ① 授業時間は、今ぐらいか、もう少し短く
- ② 授業内容は今ぐらいでよい
- ③ 授業中の雰囲気はおおむね楽しい
- ④ 授業の進み方は、今ぐらいがよい
- ⑤ 能力別の学級編成はしてほしくない

表26 授業についての希望

(%)

(1) 1日の授業時間について	いまよりずっと長く	いまより少し長く	いまと同じくらい	いまより少し短く	いまよりずっと短く
	1.3	4.7	45.9	32.9	15.2
(2) 授業の内容について	もっと受験に役立つものを	もう少し受験に役立つものを	いまと同じでよい	もう少し生活に役立つものを	もっと生活に役立つものを
	8.0	25.2	48.0	13.1	5.7
(3) 授業中のふんいきについて	もっとずっと楽しく	もう少し楽しく	いまと同じでよい	もう少し真剣に	もっとずっと真剣に
	20.0	31.8	23.2	20.5	4.5
(4) 授業の進み方について	もっとずっとはやく	もう少しはやく	いまと同じくらい	もう少しゆっくり	もっとずっとゆっくり
	1.7	10.6	49.4	33.1	5.2
(5) クラスの分け方について	ぜったい能力別がよい	まあ能力別の方がよい	どちらともいえない	まあ能力別はいやだ	ぜったい能力別はいやだ
	3.4	6.7	30.3	17.5	42.1
(6) 成績の発表について	毎回全員の順位を発表	毎回上の方の人だけ発表	時々上の方の人だけ発表	たまに上の方の人だけ発表	ぜったい発表しない
	12.5	16.3	18.6	13.5	39.1

表27 学習内容に対する希望と成績

(%)

項目 自己評価	受験に役立つものを		今と同じでよい	生活に役立つものを	
	もっと	もう少し		もう少し	もっと
トップクラス	32.0	27.5	18.8	8.7	13.0
	(59.5)			21.7	
上の方	9.0	29.1	41.0	14.9	6.0
	(38.1)			20.9	
やや上	7.6	25.1	52.5	13.0	1.8
	32.7			14.8	
中くらい	5.9	26.5	51.6	12.5	3.5
	32.4			16.0	
やや下	6.4	25.7	50.6	12.7	4.6
	32.1			17.3	
下の方	8.7	20.5	49.4	14.4	7.0
	29.2			21.4	
ずっと下	7.6	21.7	40.2	14.6	15.9
	29.3			(30.5)	

⑥ 成績結果の公表はしてほしくない

の通りであった。学校教育に対する批判がきびしいだけに、生徒たちの反応が気になったが、上述した通り、生徒たちはおおむね、学校教育の現状を肯定する反応を示していた。

しかし、考えてみると、このように生徒集団をひとつのグループとして捉え、その平均値で、ものごとを推定する態度が、学校に対する不信感をつのらせる原因なのかもしれない。なぜなら、本号で、くり返し指摘してきているように、生徒たちの意識は、成績によ

っていくつかのグループに分散しているからである。

例えば、冒頭でふれた英語の授業に対する理解度についても、図11のように、学業成績の「トップクラス」層は、授業がとてもわかりやすいと答えているのに対し、成績が「やや下」以下の生徒は、同じ授業に「まったくわからない」と反応している。従って、英語の授業ひとつとっても、生徒たちの中から、まったく対立する意見が出てくる可能性が強い。

そうした意味では、先にふれた生徒たちの平均的な意見を、少し細かく分析し直す必要がある。

事実、学習内容についての希望についても成績が「トップクラス」層の生徒は「受験に役立つものと考えてほしい」と望んでいるのに対し、成績が下位になるにつれて、「受験より生活に役立つものを望む」割合が増加してくる(表27)。

図11 英語の授業の理解度と属性

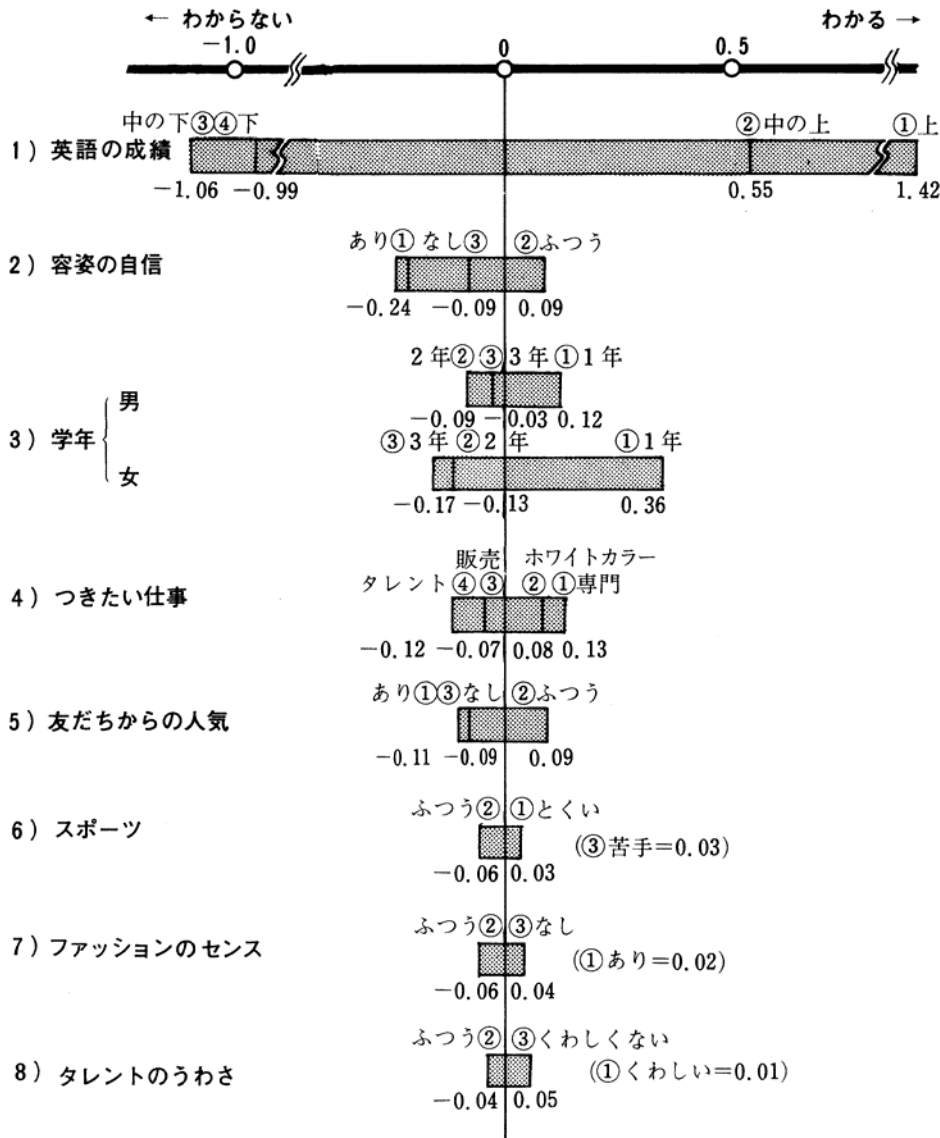


表28 クラスの分け方と成績

(%)

項目 自己評価	ぜったい	まあ	どちら ともい えない	まあ	ぜったい
	能力別がよい			能力別はいやだ	
トップ クラス	21.7	17.4	17.4	2.9	40.6
	39.1			43.5	
上の方	2.3	12.9	39.4	15.9	29.5
	15.2			45.4	
やや上	3.6	12.1	29.4	17.9	37.0
	15.7			54.9	
中くらい	2.4	5.2	31.3	18.2	42.9
	7.6			61.1	
やや下	2.0	4.3	30.5	21.6	41.6
	6.3			63.2	
下の方	2.2	2.2	27.6	17.5	50.5
	4.4			68.0	
ずっと下	5.8	5.2	28.6	13.0	47.4
	11.0			60.4	
全 体	3.5	6.6	30.2	17.5	42.2

表29 成績の発表と成績

(%)

項目 自己評価	毎回 全員発表	毎回 ときどき	たまに	ぜったい 発表 しない
	上の方の人だけ発表			
トップ クラス	34.9	24.6	4.3	5.8
	59.5			30.4
上の方	19.4	22.4	20.9	7.5
	41.8			29.8
やや上	15.8	26.6	14.9	13.1
	42.4			29.6
中くらい	12.0	15.2	21.0	13.3
	27.2			38.5
やや下	9.6	11.3	16.2	18.6
	20.9			44.3
下の方	9.2	12.2	19.2	17.0
	21.4			42.4
ずっと下	7.1	14.9	20.8	6.5
	22.0			50.7
全 体	12.5	16.4	18.4	13.5
				39.2

それと同じように、いわゆる能力別の学級編成に対する評価も、「トップクラス」層に導入賛成派が多いのに反し、中以下の生徒の6割が、能力別編成は嫌だと答えている(表28)。また、テスト結果の公表について、「毎回、全員発表」に賛成する生徒の割合は、「トップクラス」層の59.4%から、「上の方」41.8%を経て、「ずっと下」22.0%のように、成績が下がるにつれて賛成者が減り、逆に、「トップクラス」層30.4%から「ずっと下」層の50.6%へと「ぜったい発表してほしくない」の意見の持ち主が増加してくる(表29)。

つまり、成績の「トップクラス」層を念頭に置けば、学習内容の密度を濃くし、学力別編成を行い、成績を毎回公表してでも、学力を伸ばすのが、生徒たちの希望に合致した改革となるが、下位層の生徒に対しては、学力別編成を避け、成績をあらわにせず、生活色の濃い教育を行うのが望ましい学校改革のあり方となる。

2 平均的学校文化からの脱皮を

中学生時代は、その生徒なりの個性が芽ばえてくる年齢である。男子は男の子らしさを増し、女子に女の子らしさが備わってくる。また、教科による得意・不得意が、個性に関連して、あらわになる年齢である。もちろん、将来つきたい職業により、学業に対する心構えが変わってこよう。

そうした多様化の顕著な年齢の生徒をかかえているにもかかわらず、中学教育は画一さに支配されている。もちろん、そうした画一さは、日本の学校に共通するものではあるが、それでも、小学校は、子どもたちの個性がさほど顕在化していないし、その上、基礎教育という性格からいっても、共通性の多い教育に適しているといえよう。その上、初等教育は学級担任制を原則とするから、具体的な運用面にあたって、個人差に応じた柔軟性を発揮できよう。また、高等学校は、ことのよし悪しはともあれ入学時に、ほぼ同質の生徒をかかえることになるから、中学教育のように、多様な生徒をキャンパス内に同居させないですむ。学校間の格差が、生徒の個人差に対応する結果をもたらしているのである。

それに対し、中学教育は、多様な生徒をかかえながら、それにもかかわらず、クラブ活動などを除くと、選択の幅がまったく認められない教育課程編成を採用している。

昨年の秋、筆者はアメリカの西海岸を訪れ、いくつかの中学校を視察してきた。のびのびとした学校の雰囲気もさることながら、選択の幅を広く認めた教育課程編成が印象的であった。ショップ（SHOP）と名づけられた技術科の教室では電気のごぎりを使って、木工をしている生徒がいると思えば、ボランティアの教師についてオーケストラを学んでいる生徒の一群もあった。家庭科の教室では、男女がいっしょに、エプロンをかけて、ドーナツを作っていた。担任の話によると、意外と、家庭科を好む男子生徒が多いらしい。

さすがに、国語や数学の時間は、共通の枠が組まれていたが、それでも、学力の遅れがちな生徒が、別室で、特別の教師についてマンツーマンの指導を受ける姿があった。また、外国語の教室では、ブースを使って、徹底した個別指導が行われていた。しかも、外国語の中に、ロシア語やスペイン語と並んで、中国語と日本語が加えられており、日系三世たちが、たどたどしい感じで日本語を学んでいた。

あまりにも、教育条件の異なるアメリカの教育事情をストレートに日本へ持ち込むつもりはない。しかし、本号のデータを読みとりながら、すべての生徒に共通の教育を与えようとする中学教育のあり方は、理論的に破綻しているのではという印象を受けた。共通性を目指す教育は、誰にもフィットすることのないレディメイドの洋服に似ている。本号でくり返し指適したように、「トップクラス」層、「上の方」層、「中くらい」層、「下の方」層、「ずっと下」層のどの階層からも、それなりの論理で不満が提出され、一部の生徒の中には、不適応から来る病理の影すら認められるのである。

もちろん、学業不振の生徒だけを念頭におくなら、伝達する内容のレベルを下げ、進度を遅くし、実生活に密着した教育を心がければ、一応の対応策とはなりえよう。しかし、それでは、学力が中位以上の生徒から不満がのびてくるであろうし、大学や高校進学状況が変わらない以上、より高い学力を求めて、予備校や学習塾へ通う生徒が急増しよう。さらにいえば、資源の乏しさを高い技術水準で補ってきた日本の立場を考えると、教育水準の低下は、日本社会そのものを成り立たせている基盤を危うくする可能性が強い。

そうはいっても、本号でふれた中学生の姿は、あまりに暗かった。一握りのエゴイステイックな成績上位層を除くと、その他の生徒は、程度の差こそあれ、自信を喪失し、深い心の傷を負っているのである。

となると、やはり、中学教育を救う道は、生徒たちの個性に対応した多様さを、教育課程編成の中に生かすことしか考えられない。もちろん、学習指導要領の法的な拘束力が存在するから、抜本的に、多様化の道を歩むのは、困難であろう。しかし、折りしも、次年度から、中学段階でのゆとりの時間が実施に移される。こうした時間を主体的に運用できれば、学校が柔構造の社会へ変身するひとつのきっかけとなりうる。その他、体育や音楽、技術、家庭科などについても、運用いかんにより、選択の原理を導入できるのではないだろうか。そうした意味からいえば、生徒たちに評判のよくない必修クラブのあり方も、学校改革の素材となる。

いずれにせよ、従来の学校では、生徒たちを教える対象として、ひとまとめに捉えすぎていたのではないだろうか。40人の生徒たちがいれば、それぞれに、その生徒なりの考え方や気持ちがある。そうした多様さを認識するなら、ごくあたり前の授業の中にも改革の手がかりが認められるように思われてならない。

付 学業不振研究ノート

1. 学業不振の概念規定と測定法

いわゆる「学業不振児」を対象とした研究は、わが国でもかなり数多く行われてきている。それらは、初期には、「学業不振児」の概念もかなりあいまいなまま進められており、研究者によって、また、用いられる場合によって意味する内容が異なり、それゆえ、研究の取り組み方も様々であった。ことに、一口に「学業の振るわない子ども」と言っても、もともと学習能力が備わっている場合と欠如している場合では、当然異なって扱われなければならないが、両者が混同されがちであったことなどは、しばしば指摘されることである。

今日では、「学業不振児」という用語のもつ多義性を検討し、概念の明確化がなされている。一般には、学業不振の要因が知能または、その他の素質的要因に規定される場合を除き「主になんらかの環境的要因に基づいているとみられる学業成績の悪さ」を示す子どもを「学業不振児」として捉えようとする考え方がそれである。

また、このような「学業不振児」の判定規準について、下の三つの立場から次のように考えられている。

- ① 絶対評価の立場からは、学習指導要領の学年や教科の目標、内容から設定された目標水準に照らして、子どもの現実の成績が著しく劣っている場合
- ② 相対評価の立場からは、他の児童・生徒の成績の統計的平均を基準とし、この基準に照らして著しく劣っている場合
- ③ 個人内評価の立場からは、その児童・生徒の学習能力（知能）から期待される水準と照らして著しく劣っている場合

を、それぞれ学業不振の基準とするというものである。

わが国の、これまでの「学業不振児」研究においては、その多くが③の立場からの基準を採用しており、その測定法として、知能検査と標準学力検査とを組み合わせ用いるものがあげられる。第一には、成就指数や成就値^{注1)}による方法で、これは、1920年にフランシエン (Franzen, R.) によって考案された成就指数や、ピントナー (Pintner, R.) とマーシャル (Marshal, H.) の考案による成就値を求めて診断しようとするものがある。この場合、成就指数 (A Q) 90以下とか成就値 (A S) -7以下などの基準をもって、「学業不振児」とするわけだが、この基準は、研究者によって多少異なっている。

金井達蔵は、このような測度のもつ欠陥（知能が高いもの程、アンダー・アチーパーになりやすく、逆に知能の低いものが、オーバー・アチーパーになる傾向があることなど）を修正して、回帰成就値 (R A S)^{注2)}を工夫している。この値が-7以下の場合を「学業不振児」とするというように、用いられている。

このような知能検査と標準学力検査による組み合わせ測度を用いる方法に対して、両検査の妥当性や信頼性の問題、また、学業成績の規定要因として知能のみが重視されている点などから、種々の批判がなされている。なかでも、こうした測度によって見いだされた「学業不振児」が、教室場面において問題とされる子どもたちと必ずしも一致しないといった教師の声が聞かれる。そこで、教師評価を取り入れた測定法として、G.P.A.成就値^{注3)}による方法が考えられている。これは、教師による学力評価点の個人平均値 (G. P. A.) を偏差値になおして、G. P. A.成就値を求めて、規準とするものである。

前者の知能検査や標準学力検査などの客観的データによる規準と、主観によって左右さ

れがちな教師評価による後者の規準によって選ばれる「学業不振児」にずれが生じることをふまえて、選択基準そのものの研究も進められている。東京都立教育研究所(1970)^{注4)}において報告されている、学力検査により、回帰成就値を求めて選出した学業不振児と、教師評価により、G. P. A. 成就値を求めて選出した「学業不振児」の比較研究も、そのひとつである。彼らは、両群について、学業不振傾向調査の結果に有意差が認められるかどうかの分析を行っているが、この結果、同じ「学業不振児」でも、学力検査による「学業不振児」は、明確な特性、あるいは親子関係の歪みを持たないのに対し、教師評価による「学業不振児」は、これらを持つことが明らかにされている。ここでは、教師評価と性格や親子関係の歪みとの因果関係については触れていないが、少なくとも評価者である教師と、被評価者である子どもとの間にかわされる日常的な評価の及ぼす心理的影響について、大きな問題を提起している。

注1) 成就指数と成就値の算出方法

成就指数 (Achievement Quotient) :

$$A Q = \frac{E Q \text{ (教育指数)}}{I Q \text{ (知能指数)}} = \frac{\frac{E A \text{ (教育年齢)}}{C A \text{ (生活年齢)}}}{\frac{M A \text{ (精神年齢)}}{C A \text{ (生活年齢)}}} \times 100 = \frac{E A}{M A} \times 100$$

※ E A (教育年齢) とは、標準学力検査の結果より、その子どもの学力が生活年齢 (C A) で何歳ぐらいの基準に達しているかを求めたものである。

この成就指数を求める公式に明らかなように、算出値は教育年齢と精神年齢との相関が 1.00 でなければ意味を持たないものとなっている。

成就値 (Accomplishment Score) :

$$A S = (\text{学力偏差値}) - (\text{知能偏差値})$$

注2) 回帰成就値 (Regression Accomplishment Score) :

$$R A S = (\text{学力偏差値}) - (\text{知能偏差値から推定した学力の回帰値})$$

※回帰成就値は、新成就値ともよばれる。学力の回帰値とは、知能の高低によって生じる歪みを考慮して、知能偏差値のかわりに用いているもので、知能に対応した学力偏差値を求めている。

注3) G. P. A. 成就値の算出方法

$$G. P. A. \text{ 成就値} = G. P. A. \text{ 偏差値} - \text{知能対応平均 } G. P. A. \text{ 偏差値}$$

知能対応平均 G. P. A. 偏差値は、次の式で求められる。

$$\text{知能対応平均 } G. P. A. \text{ 偏差値} = r (\text{知能偏差値} - 50) + 50$$

(r は、上述の回帰係数である。)

※教師評価による学力評価点の個人平均値に換算したものを、G. P. A. 偏差値とする。これと知能偏差値の回帰係数 r を計算し、その係数により G. P. A. 成就値を求めるための回帰方程式が作られている。

注4) 東京都立教育研究所(1970) : 「学業不振児の治療法に関する研究」 東京都立教育研究所 紀要第3号

2. 「学業不振児」研究の概要

「学業不振児」に関する研究は、数多く、それらについて、簡潔にまとめられた文献⁷⁾もいくつか見られる。これによると、従来の研究は、大きく分けて次の2つの角度から進められてきたものと言える。

(1) 「学業不振児」の特性や要因分析を主とした基礎的研究であり、「学業不振児」の性格、

家庭環境・学習態度や習慣などを調べ、統計的関連を明らかにしようとするものである。

「学業不振児」を「なんらかの環境的要因に基づき、学力が知能よりも不相応に低い子どもである」とした定義と関連して、学業不振の原因を環境的要因に求めようとする研究、特に、「学業不振児」のパーソナリティ特性と学業成績との関連を分析しているものが多くみられる。例えば、大阪学芸大学心理学教室²⁾による「学業不振児の教育心理学的研究」では、学力検査を用いて選出した学業不振群(成就値-8以下)、促進群(+7以上)、普通群(0に近いもの)について、矢田部ギルフォード性格検査及びクレペリン検査の結果を比較している。対象は、小・中学生であるが、性格検査からは、「学業不振児」は精神的不安定の傾向が強く、知的教科になるほど、精神的興奮によって知的機能が抑制される傾向がみられる。また、クレペリンの総合判定からは、不振児群に異常型が多く、それが上の学年に一層明らかに現れること、作業量は不振児ほど少ない傾向にあることなどが見出されている。

その他、種々の性格検査を用いた諸研究の結果からも、共通したパーソナリティ特性(情緒不安定・神経質傾向・劣等感・不安傾向などが強い、内向的・非協調的・退避傾向・自我の弱さなど)が得られている。

こうした性格特性の次に注目されているのが、「学業不振児」の家庭的要因である。

親子関係を取り上げた研究では、家庭環境診断検査や家庭関係診断検査を用いた結果より、「学業不振児」の親たちには、子どもの教育に対して関心が低く、放任の状態であるタイプと、逆に、過干渉であったり、教育期待の高すぎるタイプがあることが報告されている。どちらの場合も、片よりのある親の態度が学習に対する子どもの興味・意欲を低下させる要因と考えられている。この他、家庭の雰囲気や物理的環境の面でも望ましくない結果が得られている。

学習習慣や態度に関する研究では、大阪学芸大学²⁾(1966)や野間教育研究所⁶⁾(1965)の報告より、小・中学生ともに、適切な学習の計画を設定することができず、学習方法や習慣形式もうまくできていないといった「学業不振児」の特徴が明らかにされている。

学習意欲の不足や欠如が、学業不振と大きく関わっていることは、容易に予測されることであるが、この領域に関する基礎的研究は十分なされているとはいえない。が、達成動機と学業不振との関連を調べた江口ら¹⁾(1965)は、「学業不振児」について、学習に価値をおかず、成績に対する要求水準が低い傾向を見出している。達成動機においては、一部の下位得点に有意差を得ている。また、学習意欲を、自主的意欲と他律的意欲に分けて測定した松浦ら¹²⁾(1969)の研究では、オーバー・アチーパーは自主的意欲が強く、アンダー・アチーパーは他律的意欲が強い傾向を示し、学業不振の要因として、自ら学習を進めようとする意欲の欠如を指摘している。

以上、基礎的研究から得られた「学業不振児」に関する知見を概括して論じられることは、彼らが本来それらの特性を持ち合わせていたために、結果として学業不振の状況が生み出されてきたのか、また、学業不振の状況が彼らにもたらしているものなのであるかを、慎重に検討してゆく必要がある、そのためには、横断的研究へと転換を図らねばならないであろうという点である。

(2) 統計的研究に相対するもう一つの方法は、臨床の立場からの研究の試みであり、教育相談的アプローチと教科教育的アプローチによる「学業不振児」の研究がなされている。

わが国では、比較的臨床的研究は少ないが、従来の研究においては、学業不振の原因として、前述のような個人的特性をとらえ、本人や親のカウンセリングや遊戯療法などにより改善することで学業不振の問題を解決へと導こうとするものが多かった。これらの研究は、主に教育相談の領域でなされている。例えば、矢吹¹³⁾(1971)は、「学業不振への自我心理学的接近」において、学業不振を自我発達の観点から捉え、その背景に神経症的葛藤によ

って生じる自我防衛作用を想定して、一連の事例研究を報告している。

また、一方で、過去の学習経過において何らかのつまずきがあり、それに起因して現在の学業不振状態があるとして、「学業不振児」の具体的なつまずきを解明し、再学習させることによって問題の解決に迫ろうとするアプローチがとられている。これが、教科教育的アプローチと呼ばれるものである。

近年、「学業不振児」の指導及び治療教育に関する具体的な方策の検討が進められるようになったが、そこでは、上述の二つの側面からのアプローチが実践の中で統合されている。つまり、治療教育は、まず教育心理学的診断により、人格的要因や環境要因、個々の学習過程のつまずき状態等を明らかにした上で行われるものであり、学習を阻害している諸要因に対する治療的指導と適切な学習指導と統合した形で行われる必然性を持つものと考えられるようになってきているのである。代表的な実践例としては、促進学級方式によるもの、治療教室方式¹⁰⁾によるもの、学習ドック方式⁹⁾によるものなどがみられる。

参 考 文 献

「学業不振児」研究に関して、本稿で引用した文献を含め、参考になるとと思われるいくつかの文献について簡潔な紹介をしておくことにする。

※本稿で引用した文献には、左肩に*印を付して示してある。

*1) 江口恵子ら (1965)

『学業不振児の治療教育に関する基礎的研究 B. 学業成績を規定する要因としての達成動機』日本教育心理学会第7回総会

：達成動機の高低が、学業成績の規定因となっているかについての研究報告。中学2年生の学業不振児について、結果から、学習への価値づけと成績に対する要求水準の低さが見い出されている。

*2) 大阪学芸大学心理学教室 (1966)

『学業不振児の教育心理学的研究』日本教育心理学会、第8回総会共同報告

：学業不振児の知能構造に関して、知的4教科における成就値が-8以下の不振群と+8以上の成就児群の知能因子別プロフィールを比較し、不振群では、非言語性因子・記憶因子の方が、思考・言語因子より高いことを見い出している。一方、矢田部ギルフォード性格検査を行い、小・中学生の不振児童群について、その結果を比較しているが、これについては前に触れた。

3) 北尾倫彦 (1975)

『学業不振—落ちこぼれを防ぐ教育の理論—』田研出版株式会社

：学業不振児に関する内外の研究を取り上げながら、学業不振の問題を多面的に検討しその予測と早期治療の必要性まで論を進めている。「学業不振児」に関する総括的な、そして比較的わかりやすい文献であると思われる。

4) 清水利信 (1978)

『学力構造の心理学』金子書房

：「学力」に関する諸研究が豊富に紹介されており、知能と学力の問題・パーソナリティと学力の問題など「学業不振児」研究においても興味深い検討がなされている。また、

紹介された内外の心理学的研究の成果は、教育実践においても何らかの示唆を与えるものと思われる。

5) 次郎丸睦子 (1973)

「内的統制型・外的統制型の不安と学力について」日本教育心理学会第15回発表論文集 P. 236～237

：自分の行為のある結果について、その人が運やチャンスによって決定されたものと感じる（外的統制型）か、自分の能力や努力によって決定されたものと感じる（内的統制型）かといった違いは、学習場面において影響をもたらしているという見地から、女子高校生について両タイプの学力差や不安傾向の差がみられるかの検討を行ったものである。一般に、内的統制型の方が学力が高く、外的統制型では不安が高いといった報告がみられているが、この研究では、両タイプ間に有意な学力差は認められていない。不安に関しては一致した傾向がみられている。

*6) 田中博正ら (1965)

『学業不振児の心理学的研究』野間教育研究所紀要23集、講談社

：アンダー・アチーパーの性格特性、学習法、家庭環境などの諸特性を、アンダー・アチーパーでない子どもたちと比較検討し、「学業不振児」の予測に関する研究を行っている。用いられた下位項目は、学習法診断検査、精神健康度診断検査、家庭環境診断検査などの諸検査である。この結果より、100項目からなる学業不振の予測票を作成している。

*7) (財) 田中教育研究所 (1971)

「学業不振児の研究の概要と問題点」, 教育心理研究22号、P. 5～14

：学業不振児研究に関する総括的な文献研究の紹介と、その問題点の整理がなされている。

8) 谷口伸光 (1976)

「達成動機と学業成績(2)」, 日本教育心理学会第18回論文集、P. 490～491

：普通学級での成功達成動機と学業成績との関係を成功への主観的確率(Ps… 成功するであろうという主観的見通し)の観点から考察しようとした。小学校5～6年生を対象とし、達成動機の高低とさらに、回避動機(不安)の高低により、計4群について比較検討している。有意差のみられた結果として、「男女とも、能力の高いものでは高達成動機—低不安群がもっとも成績がよく、低達成動機—高不安群がもっとも成績が悪かった」などいくつかの報告がされている。

*9) 東京学芸大学教育心理学教室 (1975)「学業不振児の治療的指導—現状と課題—」

東京学芸大学紀要第26集、P. 103～120.

：「学業不振児」に対する具体的な方策を検討し、教育相談的アプローチと学習指導計画を統合した形での、治療教育を進めてゆく必要をといている。また、実際に学習ドック方式による学習指導を試み、学習の個別化に関する研究も報告されている。

*10) 東京都立教育研究所 (1970)

「学業不振児の治療法に関する研究」東京都立教育研究所紀要第3号

：「学業不振児」の測定法として、学力検査を用いる方法と教師評価を用いる方法を比

較検討し、後者によりG. P. A. 成就値を規準として選出された不振児の方に明確な問題傾向が見い出されたことを報告している。

また、「学業不振児」に対して、約6カ月の集団遊戯法による治療と、その親の集団カウセリングを行い、治療後の行動面・学力面での変化について考察している。

11) 原岡一馬 (1956),(1957)

「学業成績に対する努力と家庭環境との関係」日本心理学会第20回論集、P.339
教育心理研究4号、P.159～170

：中学2年生と3年生を対象にし、知的4教科の学業成績によりオーバー・アチーパー（O群）とアンダー・アチーパー（U群）に分け、田研式家庭環境検査の結果について比較検討している。その結果、U群においては、学業成績に対する家庭環境の影響の強いことなどが示されている。

* 12) 松浦宏他 (1969)

「学業不振児の心理学的研究（Ⅲ）—学習意欲調査の結果について—」日本教育心理学会第11回総会

：学業不振の一要因として、学習意欲の欠如をとり上げ、自律的意欲と他律的意欲とに分け、アンダー・アチーパーとオーバー・アチーパー、それぞれの意欲を測定した。その結果、アンダー・アチーパーの学習意欲は他律的であり、自ら積極的に学習を進めようとする意欲の欠如がみられたとしている。

* 13) 矢吹省司 (1971)

「学業不振への自我心理学的接近—自我防衛としての学習阻害についての事例をもとに—」教育心理学研究4号、P.210～220、

：学業不振を「学業が不振である」とのみ捉え、その状態像への理解を深めることを目的として、6つの事例を報告し考察を加えている。筆者の観点は、「学業不振児の背景に、神経症的葛藤に由来する防衛作用を想定し、しかもそれらが自我発達の力動性、いわば先取的隠喩との関係において捉えられる」とするところにある。

調査票見本

1. あなたは、いま学校の授業を、どのくらい理解できていると思っていますか。各教科ごとにあてはまるところに○をつけてください。

	100% 理解でき ている	70%ぐらい 理解でき ている	半分くらい 理解でき ている	30%ぐらい 理解でき ている	ほとんど 理解でき ない
(1) 英語の授業	1	2	3	4	5
(2) 数学の授業	1	2	3	4	5
(3) 国語の授業	1	2	3	4	5
(4) 理科の授業	1	2	3	4	5
(5) 社会の授業	1	2	3	4	5

2. あなたは、学校の授業について、どんな希望を持っていますか。あなたの気持ちにあてはまるところに○をつけてください。

(1) 1日の授業時間について	いまより ずっと長く	いまより 少し長く	いまと 同じくらい	いまより 少し短く	いまより ずっと短く
(2) 授業の内容について	もっと受験に 役立つものを	もう少し 受験に 役立つものを	いまと 同じでよい	もう少し 生活に 役立つものを	もっと 生活に 役立つものを
(3) 授業中のふんいきについて	もっとずっと 楽しく	もう少し 楽しく	いまと 同じでよい	もう少し 真剣に	もっとずっと 真剣に
(4) 授業の進み方について	もっとずっと はやく	もう少し はやく	いまと 同じくらい	もう少し ゆっくり	もっとずっと ゆっくり
(5) クラスの分け方について	ぜったい 能力別 がよい	まあ 能力別 の方がよい	どちらとも いえない	まあ 能力別 いやだ	ぜったい 能力別 いやだ
(6) 成績の発表について	毎回 全員の順位 を発表	毎回 上の方の 人だけ発表	時々 上の方の 人だけ発表	たまに 上の方の 人だけ発表	ぜったい 発表しない

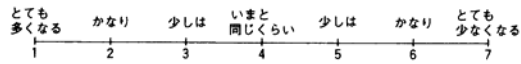
3. 中学生時代のすごし方について、次のような意見があります。あなたの気持ちにもっともあてはまるところに○をつけてください。

(1) 中学生時代は心と体をきたえる時であるから、クラブ活動や友だちとの交流を大切にしたい。	とても そう 思う	かなり そう 思う	まあ そう 思う	どちら とも いえない	まあ そう 思う	かなり そう 思う	とても そう 思う	中学生時代はまず高校受験のことを考えて勉強ひとすじにすごすべきである。
(2) 中学生時代は二度とないのだから、今、やりたいことをいろいろ経験することが大切である。	とても そう 思う	かなり	まあ	どちら とも いえない	まあ	かなり	とても そう 思う	中学生時代は将来のことを考えて、多少やりたいこともがまんした方がよい。

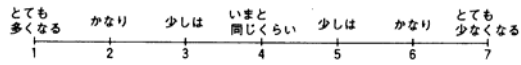
4. あなたの成績がいまよりグンとよくなったら、次のようなことは、どのくらい変わるとおもいますか。

(1) 仲のよい友だちは	とても 多くなる	かなり 多くなる	少しは 多くなる	いまと 同じくらい	少しは へる	かなり へる	とても へる
(2) 先生との話しやすさは	とても 話しやす くなる	かなり	少しは	いまと 同じ くらい	少しは	かなり	とても 話しに くくなる

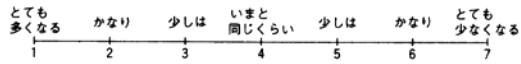
(3) 家で勉強する時間は



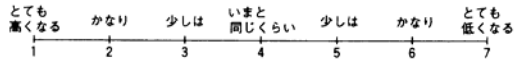
(4) 学級委員や代表に選ばれる回数は



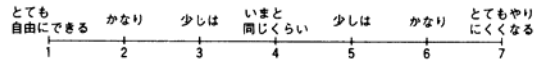
(5) 親にしかられる回数は



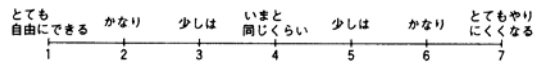
(6) クラスでの人気は



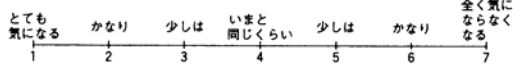
(7) クラブ活動は



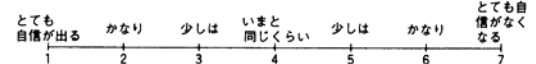
(8) 友だちとの遊びは



(9) ほかの人の成績については

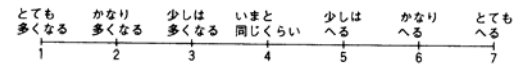


(10) あなたの自信は

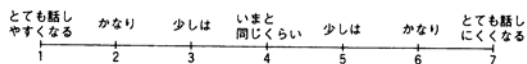


5. あなたの成績がいまよりぐんと悪くになったら、次のようなことは、どのくらい変わると思いますか。

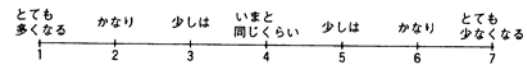
(1) 仲のよい友だちの数は



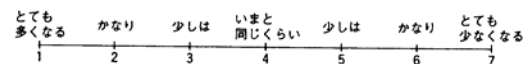
(2) 先生との話しやすさは



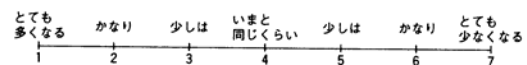
(3) 家で勉強する時間は



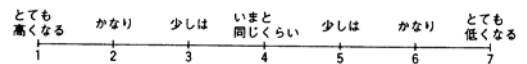
(4) 学級委員や代表に選ばれる回数は



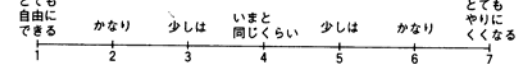
(5) 親にしかられる回数は



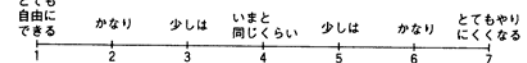
(6) クラスでの人気は



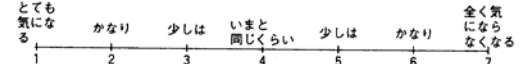
(7) クラブ活動は



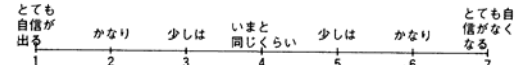
(8) 友だちとの遊びは



(9) ほかの人の成績については



(10) あなたの自信は



6. あなたは、友だちや家の人などについて、次のような感じをどのくらい持っていますか。

- | | | | | | | | |
|--|-------------|---|---|---|---|---|------------|
| (1) クラスで自分だけ仲間はずれになっていると思うことがある。 | とても
そう思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 全然
思わない |
| (2) 親は、あまり自分のことをわかってくれない。 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| (3) クラスの友だちは、自分に対してちょっとばかりにしているところがある。 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| (4) 親は、自分に無理な期待をもちすぎている。 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| (5) 先生と、なんとなく話しにくい気持ちがある。 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |

7. いま、クラスでトップクラスの成績をとっている男の子のことを頭に思い浮かべてください。その人について、あなたが思うところに○をつけてください。

- | | | | | | | | | |
|---|-------------------|---|---|---|---|---|------------------|---------|
| (1) その人は、小学生のころは、どのくらいの成績をとっていたと思いますか。 | クラスで
上の方 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | やや
下の方 | |
| (2) では、その人は、高校に入ったらどのくらいの成績がとれると思いますか。 | クラスで
上の方 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | やや
下の方 | |
| (3) その人は、将来、一流の大学に入れると思いますか。 | ぜったい
入れる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | ぜったい
入れない | |
| (4) いま、毎日どれくらい家で勉強していると思いますか。 | 4時間
以上 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | ほとんど
していません | |
| (5) その人は、どうして成績がよいのだと思いますか。 | とても
そう思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 全然
思わない | |
| ① 授業をまじめにうけているから | かなり | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |
| ② 勉強一本の生活を送っているから | 少しは | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |
| ③ もともと頭が良いから | かなり | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |
| ④ 家に帰ってたくさん勉強しているから | 少しは | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |
| (6) その男の子（トップの成績をとっている人）の性格について、下の中でもっともあてはまると思われるところに、○をつけてください。 | とても
そう思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | とても
そう思う | 自分勝手 |
| ① 友だち思い | かなり | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | かなり | 大ざっぱな |
| ② 細かいところに気がつく | 少しは | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 少しは | 近よりがたい |
| ③ 親しみやすい | どちらとも
いえない | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | どちらとも
いえない | あきっぱい |
| ④ ねばり強い | 少しは | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | かなり | 頼りにならない |
| ⑤ 頼りになる | とても
そう思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | とても
そう思う | 意地の悪い |
| ⑥ 人のいい | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |
| (7) その男の子（トップの成績をとっている人）は、「勉強するために」次のようなことを、どのくらいがまんしていると思いますか。 | しょっちゅう
がまんしている | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | ほとんど
がまんしていない | まったく |
| ① 好きなテレビ番組をみるのを | ときどき | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |
| ② 好きなマンガを読むのを | たまに | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |
| ③ クラブ活動を | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |
| ④ もっと寝てたいのを | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |
| ⑤ 学校で友だちと話したり遊んだりするのを | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |

(8) では、その男の子(トップの成績をとっている人)は、将来どんなおとなになれると思いますか。

	ぜったい なれる	たぶん なれる	もしかしたら なれるかも	まあ なれない	ぜったい なれない
① お金持ちになって、広い家に住む人に	1	2	3	4	5
② みんなから親しまれ好かれる人に	1	2	3	4	5
③ 社会的に重要な仕事をして、社会の 役に立つ人に	1	2	3	4	5
④ 芸術家やスポーツ選手など自分の才 能を生かしていく人に	1	2	3	4	5
⑤ 社会的に尊敬され権威を持った人に	1	2	3	4	5
⑥ いいお父さんに	1	2	3	4	5
⑦ まじめにコツコツと地味な仕事を続 けて、みんなの生活を支える人に	1	2	3	4	5

8. では、次に勉強が苦手だと思われる男の子のことを頭に思い浮かべてください。その人について、あなたが思うところに○をつけてください。

(1) その人は、どうして勉強が苦手なのだと思いますか。

	とても そう思う	かなり	少しは	あまり	ぜんぜん そう思わない
① 授業をまじめにうけていないから	1	2	3	4	5
② 勉強以外のことをいろいろやっているから	1	2	3	4	5
③ もともと勉強が苦手だから	1	2	3	4	5
④ 家へ帰って勉強をしないから	1	2	3	4	5

(2) その男の子(勉強の苦手な人)の性格について、下の中でも、もっともあてはまると思われるところに、○をつけてください。

	とても そう思う	かなり	少しは	どちらとも いえない	少しは	かなり	とても そう思う	
① 友だち思い	1	2	3	4	5	6	7	自分勝手
② 細かいところに気がつく	1	2	3	4	5	6	7	大ざっぱな
③ 親しみやすい	1	2	3	4	5	6	7	近よりがたい
④ ねばり強い	1	2	3	4	5	6	7	あきっぽい
⑤ 頼りになる	1	2	3	4	5	6	7	頼りにならない
⑥ 人のいい	1	2	3	4	5	6	7	意地の悪い

(3) その男の子(勉強の苦手な人)は、「勉強するために」次のようなことを、どのくらいがまんしていると思いますか。

	しょっちゅう がまんしている	時々	たまに	ほとんど	まったく がまんしていない
① 好きなテレビ番組をみるのを	1	2	3	4	5
② 好きなマンガを読むのを	1	2	3	4	5
③ クラブ活動の時間を	1	2	3	4	5
④ もっと寝ていたいのを	1	2	3	4	5
⑤ 学校で友だちと話したり遊んだり するのを	1	2	3	4	5

(4) では、その男の子(勉強の苦手な人)は、将来どんなおとなになれると思いますか。

	ぜったい なれる	たぶん なれる	もしかしたら なれるかも	まあ なれない	ぜったい なれない
① お金持ちになって、広い家に住む人に	1	2	3	4	5
② みんなから親しまれ、好かれる人に	1	2	3	4	5
③ 社会的に重要な仕事をして、社会の役 に立つ人に	1	2	3	4	5
④ 芸術家やスポーツ選手など自分の才能 を生かしていく人に	1	2	3	4	5
⑤ 社会的に尊敬され、権威を持った人に	1	2	3	4	5
⑥ いいお父さんに	1	2	3	4	5
⑦ まじめにコツコツと地味な仕事を続 けて、みんなの生活を支える人に	1	2	3	4	5

9. あなたが、「勉強のこと」を全く気にしないで、次のようなことに好きなだけ時間を使ったとしたら、あなたの成績は、どれくらいになると思いますか。

	トップ クラス	上の方	やや 上の方	中くらい	やや 下の方	下の方	ずっと 下の方
① 好きなテレビ番組を好きなだけみていたら	1	2	3	4	5	6	7
② 好きなマンガ雑誌を好きなだけ読んでいたら	1	2	3	4	5	6	7
③ 好きなだけクラブ活動に熱中していたら	1	2	3	4	5	6	7

- ④ 好きなだけ寝ていたら
- ⑤ 好きなだけラジオ(深夜放送)をきいていたら
- ⑥ 自分の趣味や特技を深めるために好きなだけ熱中していたら
- ⑦ 学校で友だちと好きなだけ話したり、遊んだりしていたら

	トップクラス	上の方	やや上の方	中くらい	やや下の方	下の方	ずっと下の方
④	1	2	3	4	5	6	7
⑤	1	2	3	4	5	6	7
⑥	1	2	3	4	5	6	7
⑦	1	2	3	4	5	6	7

10. あなた自身は、将来どんなおとなになれると思いますか。

	ぜったい なれる	たぶん なれる	もしかしたら なれるかも	まあ なれない	ぜったい なれない
(1) お金持ちになって、広い家に住む人に	1	2	3	4	5
(2) みんなから親しまれ好かれる人に	1	2	3	4	5
(3) 社会的に重要な仕事をして、社会の役に立つ人に	1	2	3	4	5
(4) 芸術家やスポーツ選手など自分の才能を生かしていく人に	1	2	3	4	5
(5) 社会的に尊敬され、権威をもった人に	1	2	3	4	5
(6) いいお父さん(お母さん)に	1	2	3	4	5
(7) まじめにコツコツと地味な仕事を続けて、みんなの生活を支えてゆく人に	1	2	3	4	5

11. あなたは、勉強や成績について、次のような感じをもっていますか。あてはまるところに○をつけてください。

	とても そう思う	かなり そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
(1) 自分は、どんなに勉強してもいま以上の成績をとることはむずかしいだろう。	1	2	3	4	5
(2) 自分は、ちょっとでも勉強をさぼると、すぐに成績がさがってしまうような気がする。	1	2	3	4	5
(3) もっとずっと勉強さえすれば、自分にもトップクラスの成績をとることができるだろう。	1	2	3	4	5
(4) 自分は、どんなに勉強してもみんなについていけないような気がする。	1	2	3	4	5

12. あなたは、次のような気持ちを持ったことがありますか。下のそれぞれについて、あてはまるところに○をつけてください。

	しょっちゅう ある	時々 ある	たまに ある	一、二度は ある	まった ない
(1) きょうは、学校へ行きたくないと思うことがある。	1	2	3	4	5
(2) 一人で、どこか遠くへ行ってしまうと思うことがある。	1	2	3	4	5
(3) このまま、おとなになっていくことが、とても不安だと思うことがある。	1	2	3	4	5
(4) 自分なんか生まれてこなければよかったと思うことがある。	1	2	3	4	5
(5) 小さいころを思うと、あのころの自分は幸せだったなあと思うことがある。	1	2	3	4	5
(6) ふっと、このまま死んでしまいたいなあと思うことがある。	1	2	3	4	5

13. では、あなた自身のことについて、おききします。

- (1) あなたのクラス内での成績は

	トップ クラス	上の方	やや 上の方	中くらい	やや 下の方	下の方	ずっと 下の方
① 英語	1	2	3	4	5	6	7
② 数学	1	2	3	4	5	6	7
③ 国語	1	2	3	4	5	6	7
④ 理科	1	2	3	4	5	6	7
⑤ 社会	1	2	3	4	5	6	7

- (2) あなたの1日の家庭学習の時間は

	4時間 以上	3時間 ぐらい	2時間 ぐらい	1時間 ぐらい	ほとんど しない
(2)	1	2	3	4	5

- (3) あなたが、全く勉強しないでいたならば、成績は、どのくらい下がると思えますか。

	とても 下がる	かなり 下がる	少しは 下がる	ほとんど 下がらない	ぜんぜん 下がらない
(3)	1	2	3	4	5

- (4) あなたが、精一杯がんばって勉強したならば、成績は、どのくらい上がると思えますか。

	とても 上がる	かなり 上がる	少しは 上がる	ほとんど 上がらない	ぜんぜん 上がらない
(4)	1	2	3	4	5

- (5) あなたは、将来、一流の大学に入ることができると思いますか。

	ぜったい 入れる	たぶん 入れる	もしかしたら 入れる	まあ 入れない	ぜったい 入れない
(5)	1	2	3	4	5

- (6) あなたの両親は、あなたにどのくらいの成績をとってもらいたいと思っているでしょうか。
- (7) では、あなた自身は、できればどのくらいの成績をとりたいと思っていますか。
- (8) あなたは将来について、どんな希望を持っていますか。下のそれぞれについて、あてはまるところに○をつけてください。
- ① 無理をしないで、自分の力でのんびりやっていたい。 自分は、ぜったい一流の高校・大学に入りたい。
- ② 自分の才能を生かして、テレビや新聞に出るような有名な人になりたい。 ごく普通に、平凡でのんびり、落ちついた生活を送りたい。
- ③ 自分の家庭を大切にしたい。家族と楽しく過ごす幸せを味わいたい。 自分は、仕事第一にバリバリ働いて、出世してゆく人になりたい。
- ④ 社会的に尊敬され、権威をもった人になりたい。 その日、その日を自由にのんびり、過ごす人になりたい。

- (9) あなたは、将来どんな職業につきたいと思いますか。できるだけ具体的に書いてください。

14. あなたは、次のようなことについて、どのくらい自信を持っていますか。

	クラス 誰にもまけない	少しは 自信がある	まあ ふつう	あまり 自信がない	全く 自信がない
(1) スターやタレントについての情報の量	1	2	3	4	5
(2) バスケットや野球などのスポーツ	1	2	3	4	5
(3) 読んでいる本の量	1	2	3	4	5
(4) 友だちからの人気	1	2	3	4	5
(5) 楽器や書道のでませ	1	2	3	4	5
(6) スタイルや顔のよさ	1	2	3	4	5
(7) 成績のよさ	1	2	3	4	5
(8) 趣味で集めているものの量	1	2	3	4	5
(9) ファッションのセンス、かっこよさ	1	2	3	4	5

15. あなたは、次のようなことをしている時に、どれくらい夢中になっていますか。

(したことがない人は、どれくらい夢中になれると思うかをこたえてください。)

	とても 夢中になる	かなり	少しは	あまり	ぜんぜん 夢中になれない
(1) 好きなテレビ番組をみているとき	1	2	3	4	5
(2) 好きなマンガを読んでいるとき	1	2	3	4	5
(3) ゲームセンターなどでTVゲームをしているとき	1	2	3	4	5
(4) 好きなラジオ番組(深夜放送)をきいているとき	1	2	3	4	5
(5) 好きな歌や音楽をきいているとき	1	2	3	4	5
(6) 試験勉強をしているとき	1	2	3	4	5
(7) 友だちと話したり、遊んだりしているとき	1	2	3	4	5

これで、おしまいです。ながいあいだ、どうもありがとうございました。